

號 叅 第

第 港 五

(可整物便郵種三第日二十月一十年十四治明)

(行發日一回一月每)行發日一月三年一十四治明

求道第五卷第桑號目次

道

○母《短歌》

八

風

左

T-

夫

◎羽村求道會◎安中涅槃會◎二月中の求道會◎春期傳道

◎信濃歌(長詩)

嘆

咏

◎絕對純一の信仰

《一乘海と大信海》

謝

◎自然の淨土◎太子讃靈感

◎善巧攝化

○ デ 及 カ釋奪傳

第六 眞の聖なる者

告 自

◎獲信の動機

原

面

次

郎

話

莪

◎歎異鈔─ 第六章

近

绚

常

觀

慶 嘆

◎眞宗慶歎 + 無為涅槃

近

角

常

觀

îij 求

《本鄉森川 BIJ 派地》

講

何: 第上 後 =

九段坂佛 道 敦 俱 樂 部

Ξ r. 後七

(日本橋鄉敦町說敦所) 會

T 道 第

五

巷

の信仰 第

《一乘海と大信海》

らず、固より其示現を言へは千浪萬波の如く、 吾人信仰を求むるものは如何にして此一滴を味ふべきや、亦いのののののののののののののののののののののののののののののののの 何に無數なるも悉く太陽を中心として運行する者に非ずや、 其一滴の鹹を味へは一瞬に四大海水の味を知るべく、星宿如 する所に迷へる固に其所也、然れども大海如何に無限なるも 近時青年道を求むるもの佛教の信仰を得んと欲するも其適歸 するのみにして單純簡潔の要領を捕捉すると頗る困難なり、 間思議の境に非ず、故に何れの經を繙くも廣漠望洋の歎を發 如何なる所に此天日を認むべきや是實に信仰問題の眼目也。 天に二日なく地に二王ならが如く、法界に二佛を認むべか 無數の星辰の

> 等諸佛は決して別々に存在するものにあらず、結局平等是一 を知らしむるが為のみ。 浄なる絶對純一の大道にして諸佛の出世、たべこの唯一の道 のででででででででででです。 でででででしる にして其道二三あることなし、畢竟一佛に統一せられ、一道 如く、諸佛菩薩の多さ質に恒沙塵數も啻ならず、然れども此

層甚しい、正湖に落魄するに至りては之を哀愍攝受したまる 愛也、 こと益々甚し、此に於てや如來の願心寧ろ、 ものも亦之を愛す、貧しきものに至りては之を愛することで も親の子に對するが如し、富めるものも之を愛し、富まざる を認めず、修行の多少を顧みす、罪悪の淺深に拘はらす、恰 破らんがためなり、而して此大慈悲、大光明の根本是れ即ち 佛の大悲、唯我等を覺さんがためなり、如來の光明唯此闇を 來生死海に流轉して、無明の酒に醉ひ、三毒の夢を結ぶ、諸 夫れ如來の本願とは十方の衆生に對する佛陀の真實也、慈 招喚也、我等あらゆる、生きとし生けるもの、無始日 常没の凡愚、罪

て往生の業と爲したまふ、是實に誓願一佛乘の起る所以也っ 辱、精進、禪定、智慧、起立塔像、飯食沙門、孝養父母、奉事師長 以て往生の業となさず、持戒を以て往生の業となさず、乃至恐 悪の衆生に在り、 爾陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをからむ て忽ち聖道門を捨てゝ淨土門に入りたる所以、亦善導和尚の 以にして、 人をほむるなりこ暴驚大師十方佛國中獨り心を西方に留る所 すなはち諸神に歸するなり、一心をもて一佛を、ほむるは無碍 圆滿道平等、 る本源也、『十方三世の無量慧、おなじく一如に乗じてぞ、二智 親鸞聖人其敎行を信じて曰く、親鸞にあきてはたゞ念佛して 一心専念を勸むるもの此選擇本願に順するの外なく、 信受したまる聖人の態度也。 りて信するおかに別の仔細なきなりと、是實に誓願一佛樂を 人初めて其指導によりて往生之業念佛爲本の大獅子吼起る、 此の如 法に一切の法を收む、是一行三昧の起る所以、常行三昧の來 くにして南無阿彌陀佛一行に一切の行を攝し、 世俗の君子に答ふる所、道綽禪師其碑文を一瞥し 攝化隨緣不思議なり。彌陀の淨土に歸しぬれば、 是選擇本願の起る所以なり、 即ち佛布施を 法然上 叉△此△

person

既に此の如き絕對不二の教を見出し得たり、悲十方無碍光の大悲大願を仰ぐを得たり、抑3十方の衆生何人か此光照をの大悲大願を仰ぐを得たり、抑3十方の衆生何人か此光照をの済衰を蒙る所以也、世の罪惡重きものは盆々此大願の攝受を発るべからざる也、如來本願に誓て曰、至心に信樂して、を発るべからざる也、如來本願に誓て曰、至心に信樂して、を解みましまして、我等がために注ぎたまふ如來の願心を憐みましまして、我等がために注ぎたまふ如來大悲の御心を憐みましまして、我等がために注ぎたまふ如來大悲の御心を憐みましまして、我等がために注ぎたまふ如來大悲の御心を憐みましまして、我等がために注ぎたまふ如來の願心。

外なさ也、 外なし、華嚴經に文殊法常、爾、法王唯一法、一切無碍人、 のみに非ず、一代強其儘含有的に皆此の響願一佛乗を説くの の外なさ也、 功徳にして、釋奪一代の説法は畢竟此誓顧一佛乘を説さたる なりと宣ふ所以、是彌陀經に說く所の六方恒沙の諸佛の稱讃。 可思議なるを讃嘆するが爲ならずや、是聖人が斷言して三世 淨無有二也といひ、云何菩薩信順一寶、菩薩了、知一 の本意に從て、十方恒沙の世界に於て無量壽佛の威神功德不 切衆生皆歸、一道一道者調大乘也といへるも亦此本願。。。 かい おんぱつこう ついの の なし、二乗三乗は一乗に入らしめんとなり、一乗は即ち第〇〇〇 の一道に非ずや、此に至りて私かに思ふ、親鸞聖人磯長聖德 太子の靈告を授かりたまひし句に曰く、我三尊化應沙界、 此に於てや初めて知る一切諸佛の法、 亦然、といふも念佛無碍の一道也、涅槃經に說て、一道清 相應地と、聖人行卷に曰く、大乘は二乘三乘あることの。 出, 生死, 一切諸佛身、唯是一法身、一心一智慧、 抑と諸佛の世にあらはるく所以のもの如來十七顧 吾人は此點に於ては一代敦中特に此一法を貴む 抑~南無彌阿陀佛の 力。無

吾人知らず識らず、合掌して至心敬虔の念忽然として起る。 忽にして清淨の蓮華を生ず、況んや清淨真實の清泉豊我等がのののののののののである。 性なりと云ふ所以なり、此の如き清淨真實の佛心に接せば吾 信心歌喜のものは諸の如來に等しといひ、信は道元功德の母。 間にあらずや、 て、善語を修習したまよ、是如來永劫の問行ひたまふ所に を起さず、少欲にして知足、和顔にして愛語、麁言を遠離し の念に住せざらん、是如來の心我心に入れるなり、華殿經 悲を名けて佛性といふ、 そなはして大慈大悲の哀愍を垂れたまふ、是涅槃經に大慈大 なく。順火炎々として亦何物をも焼かざるなし、 人穢惡汚染の輩と雖豈清浄たらざるを得んや、溷濁淤泥の中、 吾人の心此の如く不淨なり、亦不實なり、故に食愛の波高 一念一刹那も此清淨真實を離れたまひしてとなし、 順悪の炎熾なり、濁浪滔々として何物をも汚さいること 一切の衆生悉く如來の 一たび此如來の大悲に接す、 故に一切衆生悉有佛性とは一切の衆 一子として平等の慈悲を蒙るの 何人か信心 此苦惱をみ にあらず

歌喜せざるものあらんや。 歌喜せざるものあらんや。 歌喜せざるものあらんや。 歌喜せざるものあらんや。 歌音せざるものあらんや。 歌音せざるものあらんや。 歌音せざるものあらんや。 歌音せざるものあらんや。 歌音せざるものあらんや。 歌音せざるものあらんや。

信受以人本願力前念命終す。即人,正定聚之數,文具實淨信心、內內,內內,張取不捨、外緣す。

即得往生、後念即生す。即時入言心定之

他力金剛心也應,知

便,同。彌勒菩薩 | 自力金剛心也經少知

(二月二十二日朝稿了)

佛智不思議の醤願を正定聚に購入して聖徳皇のめぐみにて

阿摩のことくにそひたまム。 主々のことくすてずして 聖徳皇と示視して

救世觀音大菩薩

感

謝

自然の淨土

創設し、 然法爾の法語を癒きて、深く感する所あり、爾來常に求道学 なりて佛門に入る、平素島地默雷師と交り、其化を受く、 南無佛尊像に詣て、亦磯長廟下に越得せる彌陀靈籠に莊嚴を たり、三井拂下の後、翁閑居して晩年を樂む、翁三池囚置監を **翁獨力全責任を負ひて起ち、途に國家無限の富源を開くを得** 營を完ふす、単て政府望なしとして之を築て去らんとせし時、 を唱へ、國事に奔走し、三池炭坑の創業者にして百折不撓其經 に接し、往きて大森に翁が病床を訪ふ、翁維新已前勤王の大義 に歎異鈔第九章に就て講話す。忽にして小林秀知翁危篤の報 具足して經を誦す、 して、人鮮尤悪、能教從之の聖訓を服膺し、午後第二求道會 二月二十二日は聖徳皇太子の御正忌也、前日島田翁奉持の 人を追懷し奉る。當日東京監獄に不幸なる重罪被告人に發酶 大洲鐡然師の言を容れ敬師の事を創む、遂に因縁と 夜來筆を執りて社説を草し、法皇及び聖

近海悪世のわれらこそ 金剛の信心域かりにて 五海悪世のわれらこそ 金剛の信心域かりにて 変がく生死をすてはて、 自然の浄土にいたるなれ 変でで、万ち合掌念佛して大悲無倦の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無倦の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無倦の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無倦の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無倦の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無倦の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無倦の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無倦の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無倦の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無俗の照護を仰ぐ、翌日筆を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無俗の照護を仰ぐ、翌日華を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無俗の照護を仰ぐ、翌日華を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無俗の照護を仰ぐ、翌日華を 変るを、万ち合掌念佛して大悲無俗の照護を仰ぐ、翌日華を 変るを、万ち合掌を佛して大悲無俗の明さながに見る病体のがある。

其佛本願力、聞名欲往生、皆悉到彼國、自致不退轉、必得恰も母公と同病同日同刻なりといふ、嗚呼悲哉然れども、翁恰も母公と同病同日同刻なりといふ、嗚呼悲哉然れども、翁恰も母公と同病同日同刻なりといふ、嗚呼悲哉然れども、翁

自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはす。極、易往而無人、其國不逆違、自然之所牽。(銘文御釋)極、易往而無人、其國不逆違、自然之所牽。(銘文御釋)類佛本願力、聞名欲往生、皆悉到彼國、自致不退轉、必得

太子讃靈感

願を繰返したまふ所以なり。疑惑和讃の反面として第一、第四、第七首に佛智不思議の誓

に正定聚を云ひ次如彌勒を云ふ所以。現生に正定聚に入ること社説にも詳説する如し、第一第四節『生に正定聚に入ること社説にも詳説する如し、第一第四節「なる」

四に曰く、皇太子は觀世音の示現たる點より法然上人と並らと感謝したまよ、是れ光明名號慈父悲母の因緣を人生直接 りと感謝したまよ、是れ光明名號慈父悲母の因緣を人生直接 のようと感謝したまな、是れ光明名號慈父悲母の因緣を人生直接 に蒙りたまな事實なり、是行卷及び愚先鈔に內外因緣を示したまな所以。

松子傳の文上記父母を以て感謝したよの讃及ひ第七首佛智を實驗して信仰的家庭を實現したまひしてと。別行和讃與書五に曰く、六角堂の告命により聖人太子の三骨一廟の信念

繰返す所以。
 繰返す所以。
 繰返す所以。
 繰返す所以。
 繰返す所以。
 繰返す所以。

九に曰く、太子の守屋との關係を以て善巧方便として、人。。。。、太子の守屋との關係を以て善巧方便として、人議の誓願を繰返す所以。

生の道緣皆大悲より來る恰も王舎城の道緣を見たまふに同っつつのののののの

91

悲、爲衆修苦行。如人着鬼魅狂亂多所爲といふ所以。

小林秀知翁略傳

無い み一つを喜んで、ゆかれたら宜しからう』と、 信仰の味は唯是丈けである。 佛をのこしおく亡からんのちは誰も用ゐよ」とある。 て置いたのであつた。 陀佛をとなふべし我も六字のうちにてそ住め」とある、 である。夫につきて親鸞聖人のお歌にも、「戀しくば南無阿彌 ろしからう、人生は外の事は無い、 ---代の御教化も、 のである。 -て居る事 代の御教化も、 又蓮如上人のち歌にも 何事も佛の惠みに安んじてやられたら、 矢張り南無阿爾陀佛の一つである。 此の廣大のお惠み南無阿彌陀佛の外は 故に何事が來らうとも此のお惠 結局南無阿彌陀佛の一 「形見には南無阿彌陀 取放ず申上げ 蓮如上 他力 親鸞 0

電話で、今福間氏から電報で急に來て吳れ、といつて來たと 順を追うて申しますと、 僧昨日は土曜日で、 て讀經を致しまして、 東京監獄の典獄のち娘子が亡くられたので、 午後は九段の第二求道會である。 約束がありましたので、已を得ず心を殘して出かけました。 朝になって、是非に一度行って見度く思ひましたが、 たので、 東京監獄に行かねばならね、 私は急に福間氏の方へ伺つたのでありま 夫から監獄へ参りました。處へ宅から 此の前の講話にも申した如く、 循ほ其間にも

一 先づ其方へ伺つ 箇所他に行 のみならず 光日

一度此點をお話致さうと思ふのです。旣に皆さんが御存知の今日の題をお話する上に、如何にも有り難いから、今日は、も必要は無いのである。けれども同氏が信仰に入られた道行が福間氏の事につきては、旣に度々申ましたから、今更繰反す

講

話

善巧攝化

(水道學舍日曜前話)

に氣就かせて貰ふ事は信仰上甚だ大事であります。
をの為めに催うして下さる佛の善巧方便のも力である。此點於て、我々が日々に遭遇する色々の出來事は、皆我々一人々於日の題は「善巧攝化」と出して置きました。凡そ人生上に

其の前に 配をして居る、と申來されたので、私も非常に驚きまして。 殊に此 きました福間氏が、第八回目の手術を受けらることいふので、 週の如きは信仰の話で以て、毎日々々引き續きに喜ばせて頂 早速にお返事を上げて『唯もう廣大なる佛の光明中に攝取せ 参つたのであります。 きました。 年々そうなつて居るのであります。今年も此頃は 仰の機運の段々と熟して來るのは、實に有り難 いた事柄からお話申したら、能く解かるかと思ひます。年々信 之をお話するに就さて、 手紙て、 の一二月の頃は毎年著しく盛んになる。考へて見ると、 一度信仰の話を聞き度いと言つて來られて、急に 殊に昨日は、 明日は彌々八回目の大手術を受けるので甚だ心 質は其前夜に御子息から使がありまし **銀て「求道」の告白欄で紹介致して置** 恰も昨日一日間に私が出會せて頂 い處であるが

72 5 のに えた者は 屹度衰えて、此世に幸福の 綴くといふ事は無い。 は、一世の中は實に無常である、 年始めて参った時は、 々二三の名士を招きて信仰の話をも聞かせなされた。 かかい ち出なされたのである。 居られたのであります。 正月の「求道」の上にもある如く御病人は寧ろ非常の衛生家 に覺悟をせねばならぬのである、諦めねばならぬのである」 自分等も斯く 心のお方で であると、 然るに、 々が非常に御心配をなされ、 斯ふ云ふ風に、只諦めようと仕て居られたのであります。 從來より攝生の上には特に意を用るて居られたのであつ どうか精神上の安心を與へ度いといふる考へから、度 御病氣は甚だ悪性の癌腫で、 併し此が人世の有様であれば、大に諦めねばならい處 今此の如き難病に罹つて悲境に沈むといふは何ちいふ 前生の報といふものか、夫丈け注意して居つた 親御の御病苦を見るに見かね、 ふ言ふ具合で一面より言へば先づ愚痴を言つて の如き不幸に出遇ったのであるが、 御本人、 豫ねて申すが如く、 生れた者なら必ず死ぬる、 外皆さんの考へて居らるいに 歎げき 御一家を始じめ、 の上に数さを重ねて 病害は致方も無 御子息が大層孝 弦は一つ大 私が昨 榮 今

の場に臨んでは、人間は 信仰上に 氣附 かせて 頂く外は無いの身體を上げようとするが如きもので、到底出來ね。もう此である。自分で自分を諦めようとするのは、恰も自分で自分になられと力んだ處が、人間はほんとに諦むる事は出來ねのはなられと力んだ處が、人間はほんとに諦むる事は出來ねの人のお考は尤である、一も無理は無い。併しながら唯諦めねるが其時皆さんに申したには、「成程人情より言へば、皆さ

をつけようと思つても自分で自分を諦める事は出來ね、 海に往來して下さるのである。我々は如何に諦めよう、 智慧とを以て、唯我々を救はんが爲めに、此の人生の生死の とあって、 を聞いて、 病人は丁度第五回目の手術を受けられた後であつたが、 の廣大な惠みを喜び、惠みに安心させて頂くのが信仰の味は の安心は出來なかつた。 ひである」と、此点を力强く申したのであります。此時は御 生死の海にうかみつく 成程と氣附かれたさうである。けれどもまだ充分 我々は知らぬけれども爛陀観音大勢至は、慈悲と 大勢至 有情をよばうてのせたまよ。 大願の船に乗じてぞ 唯此 覺悟 此話

皆さんの色々も思になるのも、實に無理は無いのである。併榜に居られた御子息甲松氏が母御に、今のも話が解りましたか、と聞かれた、處が、まだ充分解からぬといふて居られる。か、と聞かれた、處が、まだ充分解からぬといふて居られる。か、と聞かれた、處が、まだ充分解からぬといふて居られる。か、と聞かれた、處が、まだ充分解からぬといふて居られる。か、と聞かれた、處が、まだ充分解からぬといふて居られる。か、と聞かれた。

550 上舌に引いて、こう、見動とっして、もこ、多でき、これですできるのである」と、も話致したのである。處が御夫人はにたよるな、唯賴にすべきは佛の大悲一つであるだと、教えにたよるな、財産にたよるな、幸福にたよるな、乃至小供の孝心さるのである。故に病氣に苦む事は、人生的には如何にも不さるのである。故に病氣に苦む事は、人生的には如何にも不さるのである。故に病氣に苦む事は、人生的には如何にも不 又斯の如く真面目に信仰をお求なさる時節も來なかつたであ た事のやうであるが、若し此の御病氣が無かつたら、斯くの 病氣が即ち佛のお恵みなのである。斯く言へは甚だ懸け離れ 悲の恵みが届いて居て下さるのである。極端に申せば、 惠は今此の病氣を離れて頂くのでは無い、 は人生の上より言へば、 やうに成つた事、 如く御一家打揃つて道を求めなさる事も無かつたであらう。 此話を聞かれて、 しながら此 んで居られた。 然るに今斯くの如く皆さんが熱心に法をお聴きなさる 佛の惠みは今此の苦味の中に頂くのである。實 如何に考へても、 えらく感動せられたと見え、 既に病氣が御縁で佛の大悲が届いて居て下 誠にち氣の毒な事ではあるが、佛 此の病氣の中に大 形を變へて喜 諦める事 此の 0

人が言はれるには、「自分には十年前に 亡くなつた一人の母の一人が言はれるには、「自分には十年前に 亡くなつた一人の母は後再び伺つて見ました處が、御夫人は彼の時初めて人生に其後再び伺つて見ました處が、御夫人は彼の時初めて人生にて、私は其儘其方へ参つて仕舞つた、翌日甲松君が來られて、て、私は其儘其方へ参つて仕舞つた、翌日甲松君が來られて、

自分の至る處に附いて居て下され、又自分の前後左右に二三 事が思ひ出され、あく是れだ、是を知らすが母の心で有つた き時であると、氣が附いた刹那に、突然十年前に別れた母の に一層の感謝を以て看護をなさるやうな具合になったのであ も此の御一家は擧つて佛教を喜んで居られたが、夫からは更 た」と言つて、 疑はうとしても疑へない。今迄泣き悲んて居つた病氣も、 人の佛が附いて居て下さるやうな感じがして に母の姿が顯はれて、夫から四五日といふものは常に其母が かと思ふなり ある。處が先日のお話を承はつて、 く佛のお恵みであつた、本願の御催らしであった事が解っ (姑)があつて、其母が非常な篤信者で、常に人生は信仰 くては行かぬから、信ぜより けれども自分は今迄左程にも思つて居無かつたので 非常に喜んで居られたのである。そして夫迄 甚だ著しき話ではあるが 7 成程今こそ信心を頂 いふ事を始終言 もら御悲慈を あり つて聞か 服前 てな < 全 1

病氣、是れ實に信心を知らしめて下さる佛の御手廻はしてある。此の御夫人が初めに、苦しいけれども斯く諦めねばならの信仰は計らひや思ひなしては無い、設へ口では同じやうである。此の御夫人が初めに、苦しいけれども斯く諦めねばならのである。此の御夫人が初めに、苦しいけれども斯く諦めねばならのである。此の御夫人が初めに、苦しいけれども斯く諦めねばならのである。此の御夫人が初めに、苦しいけれども斯く諦めねばならのである。此の御夫人が初めに、苦しいけれども斯く諦めねばならのである。此の御夫人が初めに、苦しいけれども斯く諦めねばならのである。此の御夫人が初めに、苦しいけれども斯く諦めればなら

であります。
であります。
なで真に信仰の光りの中に入る事が出來たのである。
なで真に信仰の光りの中に入る事が出來たのである。
なで真に信仰の光りの中に入る事が出來たので處で初めて其刹那に人生の光景が一變した、今迄の人生の心態であります。

で、聖人が人生の上に深く大悲をお喜びなされた味はひが籠に、聖人が人生の上に深く大悲をお喜びなされた味はひが籠に、聖人が人生の上に深く大悲をお喜びなされた味はひが籠に、聖人が人生の上に深く大悲をお喜びなされた味はひが籠

して、其人間の最も頂き易いやうにと、種々に御導き下さる佛陀は切なる大悲心より我々一人々々の心の有樣境遇を見通 如く仕ようと、 れて下さるのである。 迦彌陀の慈悲の父母は、 る、人生の不幸に沈んだ者には、 巧方便は質に種々にです。病人には病氣が善巧の御方便であ して、其人間の最も頂き易いやうにと、 病身であるから斯くの如く仕よう、此子は横着だから此の 和讃をお讀みになると皆さんる解かりになる如く、 釋迦彌陀は慈悲の父母 われ等が無上の信心を 十人十色に其子其子に應じて心配する如く、 例へば幾人も小供を持つた母が、 種々に我々の為めに御方便の手を重 發起せしめたまひけり。 不幸が善巧方便である。 佛の善 此子

て参つたのであります。其時申したが、一言では有つたが、此方の兄上の嗣道といふ方が私の舊友で、此兄君から頼まれ外留米で祟谷四柱といふ方を病床に訪ねた事があつた。丁度兹で一寸思ひ出しましたが昨年の春九州に参りました時、

0

つたが、 ました。 活も、我々は知らずに居るが皆此の御方便に催うされて居る 御方便であるばかりで無く、 今の和讃であった。 居られたさうである。そうして二三ヶ月を經て遂に逝かれ かも知れぬ。 が無かつたなら、貴君は徒らに信仰に行く事が出來なかつた に見ゆるやうであります。夫から私は一向手紙も上げずに居 て頂く事の出來るのは、 といろ通知をうけたのであります。 く感じます。一つてない、 「青年の身で御病氣をなさるのは一倍苦味も多いであら けれども弦が大悲善巧の御方便である。若し此の御病氣 其後は毎日「種々に善巧方便し」と繰り反して喜んで 處が御病人は泣いて喜んで下された、 私が此時も今の和讃を引いて 御病人に 申した 然るに今此の病氣が御縁て廣大の惠みを喜ばせ 私は近頃殊に此の種々といふ文字を有 質に有り難いのではないか。」と申し 質に種々にである。我々が日常の生 人生上の事は善惡共に皆此御 種々である。病氣になつたのが 其様が今も目 方 17

廣大の惠みが有りながら、 自分で信仰の内と外とを區別する事も入らね。兎に角今迄は なのであります。 仰の人となつた時である。有り難いと解つた事が、 つてもよいが、何れにしても有り難いと気が附いた 此の御方便を受けて居るのである。信仰はどららからどう言 福間氏のみならず ある。處が一點其のお惠みが有り難いと氣附くなり、 話が横道に這入つて、大層話の順が狂つて來ましたが、 自分で信仰を求めようとしても 崇谷氏のみならず、 自分で御惠みを隔て、居つたので 我々も皆んな日 いかね いかね、又即ち信仰 時が、信 人生皆 夜に

ても善い位になるのであります。 あると言つて居るのです。 では堪え切る事が出來ね。普通に道德や修養といふ事は、 つて居るのは、人間の立場で、自分の氣儘を抑えて、 では人間が苦痛を忍びて爲す所に、價値が有ると言 て善をする事である。 けれども或程度以上は、 之を普通に、修養である道徳で 人間 努め 、の或力 0

つて、 頭々急になつてとても我慢が出來ね、 質に偉大なる事であると思ひます。自分の子も妻も、乃至自 が吾人を助け玉ふと云ふを聞きしものにあらずや二獲信之記 た。其病苦の極に達して病床に仰臥しつく、ふと「余は佛陀 ももう止めぢや、と言つて珠敷を切つて仕舞はれる。 参照)と氣附かれたのである。弦で氣が附かれたといふは、 う親孝行は止めてある、又今迄は珠敷を繰つて來たが、 話として、遠慮なく申すのです。 回目の手術をうけられた時には、もう堪へ切る事が出來ね、福間氏は今迄は能く堪へて來られたのであるが、此の第一 も今迄色々と力を盡して見たが、もう此上は仕方が無い言して、美麗なく耳でのコー・コリーイニュー 抱せらるけれども、 くなつた。其處で 御子息や 御夫人は 全力を 盡して 種々に介 病苦に 攻められて、心が 急になり、前後を 顧みる のである。 の身體迄が當にならぬ最後に至って、 病人がづく 何とも仕方が無い。 ~病床を起たれる、とやうな騒ぎになつ 出て行つて仕舞ふと言 其處で御子息は、 佛の大悲に氣附かれ 私は弦は信仰の 除裕心無 病人も 信心 自 B 分

行をして見ても、 又家族の人達より言つても、今迄根限り盡し、 其場で親の病氣に代はる事も出來ず、 根限り親孝 何と

> 頂いた時が信仰に入った時である。此福間夫人や崇谷氏は、 入られたのであります。 0 お恵みであると解るのである。 つて病氣が佛の御方便であると氣が附いて、 更に角惠みに氣附かせて 信仰に

あるが、 つて、 い手に取つて見度かつた。處がお恵みが解かつてからは、紙で、讀めば屹度不快に感すると知って屋なから、名が 悲しくも思ふ時でも、大悲の前には、皆消えて仕舞ふ」と言 はせて頂けば不足も何も無くなつて仕舞ふ。人情では辛くも 足に思つたは人を相手にして居たからである、 を手に取らうとしても、側に亡母が居て、夫を止めて下さる、 と言つて居られる。 偕て福 讃めば屹度不快に感ずると知つて居ながら、 喜んでお出になる。之はまだ信仰に入られぬ前の事で 他より一通の手紙が來た。其手紙は餘り善く無い手 間氏の御夫人は夫から非常に喜ばれて「今迄人を不 佛の惠みを思 今迄は 0

なつて、 ます。 就さては、何らかと言ふに、旣に一月の求道にも「獲信之記」 惠みに這入らい迄は、矢張り自分で努めてやつて居るのであ 質に立派な紳士である、 信仰後は無論の事であるが、從來より極めて眞面目な方で、 始めは隨分間かれても真質には未だ解から無かつたのであり が載つて居る事故、 のです。けれども人間は、如何に立派な正しき者でも、 以上は御夫人の喜ばれた道行きである。次に福間氏自身に 即ち自力で修養して居るのである。普普に人生の修養と 處が第六回目の手術を受けられた後で、病苦が激しく 起ちても居ても堪えられ無い。この福間といふ方は、 今更言ふ迄も無いのである。 決して無理など言ふ人では無かつた が御本人は 佛の

らねばならねやらになつたのである。 も仕方が無くなつた。も一つ言へば親孝行の爲めの念珠は 切

聖人は「歎異鈔」に宣はく

親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念佛まらしたるこ といまださうらはず云々

えて仕舞

てある。 めた時、 那に、 爲めに考へ、子が親の爲めに憂へた處が、 病苦の中から書かれたのが、一月の「求道」に出た「獲信の記」 ねばならいやうになるのである。けれども此の極に達した刹 り外に仕方がなくなるのである。親孝行の爲の念珠は、 る間は、 とかいふ人生的の同情の言葉は仰せられて無いのである。 なされた。 が、父の頻娑羅王を牢に押し込め、又母の章提希夫人を苦し 屆いて下さつたのである。之は信仰上最要點であります であります。 であったかと氣が附いて見れば、もう嬉しくてたまらない。 のである。 と。親孝行の爲めの念佛ならば、 丁度此時が第六回目の手術の後で、其嬉しさの餘り、 此間もふと氣が附いたのであるが、 念、 最後は倒れるより外に道が無い、 人間は **得尊が韋提希の請によって、王宮に降臨して説法を** 此の彌々の最後に達した時に、 其時釋奪は一言も、 佛の恵みは斯くの如き者を助けて下さるお慈悲 如何に己を制した處が、人間相手にやつて居 お前は氣の毒だとか、不幸だ 最後に行けば消 觀無量壽經で阿闍世王 始めて佛の惠みは 最後には止めるよ 如何に親が子供の 切ら 兹

が参りまして、御病人から承はつた話を傳へ度いからてある。 扨て私が今日斯く福間氏の話をした所以のものは、昨日私

この喜びを告げ度い爲であらう。 以て書いた文字なのであります。 どうか弦を察して呉れ」といはれる。夫が今言ふ如く皆血を 惠み中のものである。夫故自分は此身體を飽迄大事にして、 昨日は第八回目の手術で、 の身で自分の身ではない、皆佛の物である、佛の廣大なる御 りで彼土に参らせて貰ふ迄、 大のお惠みを喜ぶばかりてある。 もう書く事が出來ね。自分は佛の御恩が身に除つて嬉しい、 す)自分は此の病苦の中で斯く喜んで居る事を書き度いがす)自分は此の病苦の中で斯く喜んで居る事を書き度いが して、 何時淨土 みを受けた事は質に何とも言へ以程有り難い、 つて居つたのであります。けれども御 も竦かにせぬ考で居る。とうか此の喜びを聞いて欲しい、 へ以苦痛を甞めて來た、 必ず此事を皆んなに話しませら」と申した處が非常に喜 ました。 7 いた次第は、一御病人は我々を長老と言つて居られるので 文字に書いて日はるくには「自分は今迄殆んど何とも 尚ほ自分の喜んだ初めを皆んなに話し度いと言はれ 叉一は私に聞か 字々全く血 非常に喜んで色々の話をせられた。一 へ引き取られても更に心に思ひ殘す處が無く、 告げ度い為であらう。苦しい病氣の中から、貴方の心に別に求むる所があつてではないが 苦味の中から筆を取って御話になるので皆解 今日私の來た譯は、一は貴方の喜びを聞かせ度令なのであります。で私の申したには「能く解 てあると言はねばならねのである。 せて澤山の人に喜びを分かち度 が此の苦痛の中で此の廣大のお惠 此世に在る限りは、此身は自分 だが廣大なる佛のも引き取 病人はノー もはかられぬ程に追 字一派位の話 は今日長老 へ鉛筆 只廣 そら V Di

> り浣膓 は常行大悲と言つて、 へて居らるしやうであつたが、中頃になつて突然「皆佛ぢや行かぬ。其の爲め本人も甚だ氣が進まぬようである。何か考 物がまだ充分に下つて居ない。 澤山の人に話しませう」と申し る。貴方のお心は即ち佛意の存する處であるから、 人に話すといふのであるか、 ろ御病人に人生的に同情心を起して、 婦も皆佛であると喜ばれたので、私は非常に驚いた。 戀聖人の三十三才の時にお授けなされた善導大師の文 の言の如くなされたら宜しからう」と言つて、 のであります。 居つたのに、 其中に 〜」と言はれた。 之は一族をはじめ、 其處て又私は「實に有り難い したりして、 爾々手術に懸るやうになったが、 本人は是程に喜んで居られる、私は實に驚いた 其處で私は、「何事も佛陀のお惠の中に、 色々下さらとするけれども、 一旦信仰に入つた者は、恵みが溢れ 貴方のお心が正に常行大悲であ くとするけれども、思ふやうに、其處で醫師は又下劑を用ゐたなったが、何らいふ譯か腹の た事であった。 貴方のお 煩惱を起しつ、眺めて 兹に居る路師も看護 心である。 若不生者、 法然上人が親 私は寧 醫師

と申した。又熊谷蓮生坊へ法然上人よりおつかはしなされた此文を出して、此通り佛の惠みは毫も間違いのない處である

必得往生、

若我成佛、

十方衆生、稱我名號、下至十聲、

彼佛今現在成佛。

當知本誓重願不虛

衆生稱念。

無阿爾陀佛と申せば、十悪も五道も三寶滅盡の時の者も、 義なさを義とす、様なさを様とす。 後きは深きなり、

られる一家の方も皆此の様子を見て笑つて居られる、 あります。 ても病床とは思へ以程であったのである。 して往生を遂け候なり、 いふや言葉を讀んで、 一期に一度も善心なら者も、東西わらまへぬも すると病人はにてくくと笑つて居られる、旁て弓葉を讀んで、決定往生疑ひなき事をも話したので 釋迦彌陀を證とす 私はまた進んで のも 何らし 決定

生死の海にうかみつく、 大願海のうちには、 金剛堅固の信心の、 なかく生死をすてはてく 陀觀 誓の船にのりぬれば、 陀の心光攝護して、 濁悪世のわれらこそ、 音 大勢至、 自然の淨土にいたるなれ。金剛の信心はかりにて、 ながく生死をへだてける。 有情をよばうてのせたまふっ 大願の船に乗じてぞ、 おだまるときをまちえてぞ、 大悲の風にまかせたり。 智愚の波こそなかりけれ、

行く」と申し費つて可い。 は 申した護信の日も十八日であったさうである。 如くお話して居るうちに、益々有り難い話が出て來て、昨日 度々言はれるには、「自分が死んだら醫學の爲めに解剖をして られ 一月の十八日は、 の喜 応度何か
である。
今日も質に
難有い事で有つたと
喜んで居 斯の如き具合で、 た。 等の和讃につきてもお話致したのであります。段々斯の と申して居られる。 びを知らせ度いといふ御本意であるからであります。 私は此の喜の中に別れて歸つたのであります 又臨床講義に行く必要が有つたら、何處へでも 御生母の祥月に當るさらである。又先程も 今日此の事を話したのは、御病人が病中 又夫とおなじく 十八といる日

> あるっ 之をお話するは本人のみならず、佛の御意であると思ふので して居られるのである。私は昨日其の御様子を見てきたから、 を見て信仰の爲めになるならば、何處へても行くから」と申

例へ病人が後に佛のみ國へ生るゝ事が見えたとしても、若し 無いと知つて居つても、矢張り結果を見る事になる事である。 出來ると豫期して居つたら、設へ信仰は活動や平安の爲めで茲に注意を用するのは、信仰を得れば平安になる、活動が る。我々は此の切なる御方便に催うされて、終に一點難有い 如き難病の中にても、 なる事が來つたとしても皆佛の善巧の御方便である。斯くの ます。(一月十九日) 仰に於ては結果を見る事はない。 お惠みを頂く事がなかつたら、矢張り大なる間違ひである。信 と氣がつくなり、 一度に隅なく 惠みを喜ばせて頂く事は出來るのであ 大悲を頂かせて貰ふのてあり 人生の出來事は、 設へ如何

來往既爲自在人。

行 上

江山未借神通足。 學人勿厭草鞋冷。 聖中即事

未臻三尺沒車輪。 曾有少林斷臂人。

傳

ジ タカ釋尊傳

第六、眞の聖なる者

きて説法したまへり。 佛一時ジュタバナにおはし、時、多くの財をもてる僧に就

類まで貯へたり。彼は仲間にゆるさる、限りは、何くれとな れるものを有しい。 隱家と炊事場と藏とを建て、藏には米は更なり、乾酪の如き 心を發して出家せり。此人得度せし時、おのれの為に一つの 甞つてサバッチに富める地主ありしが、妻の死により菩提 よさに備へ、衣類の如きも、日夜に用ゆるさまし トの異

一日彼は彼の衣服敷物の類を干さんが為に部屋に擴げたり 衣服等を見て彼に唯の所有なりやを問いね。 地方より來れる數多の僧侶宿を求めつく此家の前に來

「我の所有なり兄弟よ」と彼は答へね。

「おれど総て此等の衣類は皆汝に屬するか、」

「然り我に属す、」

みもとに引き立て行きけり。師彼等をみそなはして問いたま 「兄弟よ佛陀は三組の衣服をのみ出家にゆるしたまへり、然 我等は彼を大聖に連れゆきて問ひ奉るべし。」とて彼を師の るに汝は自制の法に入りながら かくの如く奢侈に耽れり、

「何の所以をもて彼の意に背むさて引きつれ來りしぞ、」 主よ此僧は多くの財を有せり。」

「汝は彼等の云ふ如く多くの物を有するか、兄弟よ。」

「汝は如何にして奢侈になりしぞ、 是を聞きて彼は腹立たしげに叫びて曰く、 克己を甘んじて忍ふべく諄々と敵へしにあらずや、」 我は少さに満足し

「おらば我はかくして暮さん、」

とて彼の衣を悉く脱し、 々の中に立ちたり。 唯腰のあたりにのみ僅かを纏ひて人

師は忽ち彼の怒を沈めてのたまはく、

二年の外し含善心をもて生活せり、然るに今佛陀の貴き法に を昔の廉耻心を失なへるの

甚だしき」と、 入り乍ら、大衆の面前に於て汝の衣服を脱し、怒れるは、何 「おれど兄弟よ汝は甞て水靈なりしとさ、よく耻を知り、 +

此時彼は佛の宣ふを聞き、本心に立ちかへり、 世尊を禮し、 悲しく座につきぬ。 再び衣を着

世尊は生死海に隱れし事實を明かにしたまへり。 此時、僧等は其因縁を説きたまはんことを乞へり、

確は其王の正妃の胎宮に宿りたまひき。王子誕生してマヒン セーサと名づけられたり。 し頃第二の王子生れたり、是を月太子と名づけたり。月太子 昔ケーシ國のベナレスにブラマダツタといふ王ありき。菩 彼成長して自ら彼方此方走るを得

に彼女は一子をまふけね、此王子をは日太子と名づけたり。 王は又他の婦人を正妃の位に上げたまひけるが、彼女はやら 王彼の幼なき王子を見て、歌のあまり、妃にむかひ、 恰かも少むを得るに至りし頃菩薩の母は遂に失せたまひね。 ~に王に親しみ王の愛を得るに至りぬ。かく幸よくして途

「我愛する者よ、我は汝の欲する物は何なりとも此太子の爲 に與ふべし」といへり。

「王」我太子生れじ時妾に贈物を與へんと約したまへり。今願 待ちね。かくて彼女の王子成長せしとき、王にむかひて妃は、 はくは我息子に王國を與へたまふべし」と乞ひけり。 されど妃は此約をはかたく胸に收めて、彼女の要する時を

彼の母は我に王國を與へんことをこへり、我は實にか」る心 や」と直ちに二子を呼びて日はく、「我子等よ、日太子生れし でか汝の王子にのみ王國を與へうべき」と彼女の乞を拒みぬ とき我は我歌のあまり、贈物を與へんことを約しぬ、然るに今 もへらく、「妃は他の二子に對し悪をたくめるものにあらず 後かへりきたりて此國を統べよかし、そは汝のつぐべき權利 悲しけれど暫らく森にまぬかれたまふべし、而して我逝去のれば、必ずや彼女は汝等に對して惡逆を企てつべし、されば あり」とかくて泣き哭しつく、彼は二子の額を接盼して森に 王いはく、「我二子は火の炎の如く光榮あるを、我如何にし されど妃は王の前約を賴みて求めて止まざりければ王はち 電もあらざりしなり、 されと婦女の真性は殘酷なるものな

> たり、而して日太子は敏く事の成り行きを知りておもへらく、 り園に遊びつくありしが、兄等の宮を去らんとするをみとめ 我も亦我が兄と共に行かん」と從ひ行きけり。

くるや樹の下に座して日太子に宣ふやう、 彼等はヒマラヤ州の山中にいるまでゆきね。菩薩は道のつ

なるウエサヴァナによりて水靈に授けられたるものにしてが後我にも亦蓮の葉に水をもち來れ」と。抑々此池は妖怪の長 エサヴァ 「やよ日太子よ、汝は彼方の池に行き、自ら沐浴し、飲みし ナ水靈に日ひける様は、

「胸今以後水に下り來らん人々は悉く汝の餌としてゆるすべ からずしと。 し、されど唯真の聖なる者につきて知れる人は決して食すべ

●必ず真の雲なる者を説明せんことを乞へり、 ざる時は直ちに捕へて食ふを常とせり。 されば水靈はヴェサヴァナの命により水に下り來る人毎に 若し彼等答へ得

水震は彼を捕へて、 日太子は池に至り躊躇することなく下りゆきね。此時

燃亦彼を捕へて難問をかけね。 「汝は聖をしらずと」水底に沈めて洞穴に引き入れたり。 「オ、然り、聖なる者とは日、月と神をいふ」と答へね。 「汝は聖なる者は何なるかを知れりや」と問ひね。 菩薩はあまりに彼の歸りの遅さを案じて、月太子を送りね。

「汝は聖なる者を知れりや」

「汝は聖をしらず」とて又彼をも沈めたり。 我知る天は聖なるものなり」と

101

彼等住みなれし宮を殘して出てんとする時、日太子はひと

のほとりに至りしとき二人の弟等の足跡をみて水 とふみしめ、 月太子も節り來らざるを以て遂に菩薩は自ら趣むされ、 彼の劒をはき、弓を手にもちぬ。 此池に水靈の住めるを悟りね、されば足をしか に下りゆ

魔は菩薩の水に入らざるをみて、 樵夫の形によそほひ、 出

て來りて菩薩にいはく、

き莖を食して腹をみたすべし、 池に入りて一浴し、喉をうるほして渴をいやし、蓮の柔らか 我友よ、 よくだ來りし、 汝は旅に疲れしなるべし、 蓮の華も折るによろしからず 彼處の

我が弟等を捕へしゃのは汝なるべし」 されど菩薩は彼を見て直ちに惡魔なるを知り、 いはく

「然り我なり」と彼はいひね。

何の故に」

我は此池に入るものを捕ふることを神にゆるされたるな

「汝は聖なる者を知らんと欲するや、」 「さなり、 「何とや、 聖なる者を知る人を除く他悉くゆるされたり 汝はすべてをゆるされしか」

「さらば我は汝に聖なる者につき説くべし」

我は旅に疲れて身體もいたくけがれたり、」と。 いざ語るべし、 時菩薩のたまはく、「我汝に此事につきて語べし、 我は誰が聖なるかをしることを得べし」 されど

水靈は菩薩を浴せしめ、 食をしつらひ、 水を運び、 花もて

> 座せしめぬ。 菩薩を飾り、 香物を塗り、 美しき園亭に座所を設け、 菩薩を

きくべし」 「謡かに聴け、 菩薩座につき、 よく耳をかたむけて聖なるものは何なるかを 水靈を足下に近づけて曰く、

と次の偈を發言したまへり。

此等の人を性の真に悪なるものといふべし、 言行共に善良に慈愛ふかし、 心罪に汚れず清淨純潔にして

水靈此偈をきくしとき、 心に甚く威じぬ。 乃ち菩薩に向ひ

與ふべし、何れ 「オ、賢なる師よ我は汝を信す、我は汝に汝の兄弟の一人を を我は連れ來るべき」と。

「若き方を連れ來るべし」

順じて行はずやし 「されど師よ、 汝は聖なる者につき悉く知れり、 汝はそれに

「汝は何故に此問を發するか

「汝は長者を輕んずる者にあらずや、汝は二人の中若き方を れ水らん ことを乞へり、 汝は年長者を敬せず」

「魔」、 子は道中我と共に來れ て我等の父は彼女の乞をゆるさょりしかは、 母が我等の父に王國を乞ひしも彼若さ太子の爲なりき、而し んことを恐れて、此山中に我等を送りしなり、 ど今は此若さ太子の爲に我等は此森に來りしなり、 我は聖の何たるを知り、 6 然るを、今我彼を失へば、 又それに順じて行へり、 我等に危難あら 然るに彼の太 叉彼の 3

我此耻を避けんが爲に汝に先づ若き王子を連れ來らんことを に懸は彼を喰ひぬといふとも世人はいかて我言を信ずべき、

を知るのみならず、なほ聖者としてよく行へり。」 り連れ來れり。 「實にも汝はよくだいひし、オ、師よ汝はたどに聖の何た かく彼は真心もて菩薩をほめ奉りし後、 兄弟二人共水底よ

されば、 しつく暮せり、此邪行は汝をして永く惡生をまぬかれしめず ひて生けるは前世に悪業を作りし故なり、今なほ汝は罪を犯 其時菩薩彼に宜はく「友よ、汝今世に魔と生れ他の肉を喰 以後惡を止め、善を行ふべし」と。

此等の言をもて、菩薩は途に彼の行を改めしめね。 彼の惡行を翻せしかば菩薩は彼の保護のもとに數年を暮し 魔は全

與へたり。而して菩薩は正しく王國を治めぬ。 に快き住居をつくり、常に花環、食物等の精をつくして彼に は月太子を世嗣とし、 伴なひて、 一日菩薩星を觀じて父の死を知りぬ。されば彼は水靈をも ベナ レスに歸り、王位をつぎたまひぬ。 日太子を元帥に任じたり。 又水靈の為 而して彼

に入りぬ。佛陀又のたまはく「彼の水靈とは奢れる僧、 尊此譚を終へたまひし時彼僧は涅槃に導くべき第一の果 テンダ、月太子とはシャ 1リプッタにしてマーヒ 日太子 ンセー

告

B

信

0

はすれど約まる所疑心自力を捨てく聞即信であるとの事です 煩悶に煩悶を重ねました。然るに僧の申さる」には色々説法 たが何分初めての事にて聞き分けも出來ず、夫れより日々奏 と深切に申して下された故、早速其日から聽聞に出掛けまし 申さるしには此頃出張所に説教もあるから佛説を聞きなさい 向に來て下された序に私の煩悶を御話し致したる所 て益々苦悶の境に陥りました。 は終夜一睡も出來ず從つて身體も衰弱致し、愈々神經衰弱し 第に悪くなりました。夜分も三時間位も眠るは善き方にて 亡致しました。夫れて私も病中の心配等にて脳神經に陷り **盡しましたなれど、壽命は如何とも致し難く途に七月十日死** 院致させましたが 分も眠られぬ所へ心靈上の煩悶が加はつたものですから、 々昨年四月下旬より病勢一層募り又々入院致させて種々手を 、何分にも私には信心が獲られませぬ、付ては神經病にて 私の家内が一昨年三月來病氣にて病院へ入院致させ其後退 引續さ本復と云ふ次第に参りませ 夫れですから國許の親戚から 或日専修寺出張所の御僧が回 御僧の 次

に自分の身體は愈々衰弱して死期は切迫したやうにも思 ましたが るばかりだから國許へ來り保養をせよ 私の病氣を心配して呉れて、 と決心しました。 ふやうにしたのが善いと切りに勸めて吳れましたから、歸京雑誌は誠に結構な本ですから夫れに依りて安心を得させて貰 戚方へ行き保養をして居ました。けれども苦悶は飽迄苦悶て が其後中陰も明けましたから旁へ故郷へ巻りまして津市 る心算でありましたから、 ことは廢めやうと云ふ念が起つたのは四度や五度でありませ 經の上に又々此 もなくナー月發行の分を送って吳れましたから、 後早速東京堂へ求道の購讀を申込んて置きました。 住職の申しますには、東京の近角様の主宰される求道と云ふ ものが出來ません しましたが、 てしたが夜になると又考へ出し 然として癒りませんから一ヶ月計りして又々歸京すること 熟ら人生の無常を思へは自分程不幸な人生を辿つて來た 或は亡妻が導ひて吳れるのかとも思はれるような氣も起 が世にあらうか、是れ程苦心しても心霊の慰安を得ると 樣の次第で安心と云ふものが出來ません。夫れて腦神 何分讀んだ事は分つて居る様でも心の落付きと云ふ 其節故郷の親戚の或寺院へ暇乞に行きますと ては亡妻の中陰が明けてから一旦歸國 一月二十日の夜に至り、 の順間で到頭 夫れから夜の十一時に及んで静かに考ふる 併し毎夜繰返し繰返し拜讀しましたが矢 親戚等の勧めも用わませんでした 其儘にして居ては 根氣が疲れて、 てどうしても廢すとが と度々書面を呉れまし 愈々佛法は止めやう もう佛法を聴く 益々病氣も夢 直様拜職し すると間 の親 出

其儘兩手を差し延し合掌して御稱名を唱へました。すると忽 求道を取り出し色々考へ込んだ處が相變らず分つて居るやり 御法は止めやうと固く決心したもの、又次の夜になると不闘 らば内部へも行かれるのであつたらうが生きて居たものだか のてす ち黑雲が次第にバッと晴れ行くやうの感じがしました、そこ 私の心の中になんとなくと答へたかと思ふや否や心の中に白 ても又々心が動亂して止める事の出來ないのは切に の如く種々の妄念が起りまして煩悶の極俯伏せになりまして て心の落着きが出來ない。 ら這入る事が出 の夜になりました。 を抱 つたならばあれが極樂であらうと又々佛法の事を思出して あるせいか、 夜の夢を思ひ出しては實に不思議な夢で、 のである、と思ふ一刹那、 3 有様は只事ならず不思議なるかなと歌喜の涙に咽びなが のではあるまいか、彌陀の御慈悲に執着せられたので 0 充満するを覺へました、是れは不思議と思はず知らず へた態深い たのだと申しまし すると耐人の申には失れは結構な夢で貴方は極樂を ら一晩の夢で實に長い夢でありました。 に向ひまして昨宵の夢の一條を息子 左れば御稱名は口が稱へるのでなく信から出 來なかつたのだらうと大笑をしまし うかと思ひます。 思案に沈みました。是程度々止 其夜十二時頃に至りまして又々十日 引續き苦悶に苦悶しつく二十六日 でから、私は若し死んで居つたな 私の心に一大變化を來しました。 以上の不思議な夢の覺めす 若も目が覺めな 夫れで私は めやらとし や嫁に話 郷陀に迫 73 の夜 郎に

105

形の路 ます、 出ました、唯見る古風壯麗なる門を見出しました、門前に丁字 可思議な夢です。私は突然高山重藍たる人跡の絶えた山間に 眠りに就さました。すると間もなく奇夢に入りました、質に不 りにて愈々氣も心も一時に疲れ、 せんが遙かに望めは門内深く幾棟ともなく壯麗なる建物が 形の路に立つて居るのであります。門は堅く鎖して窺はれま つて聳へて建物の中部以上を見るとが出來ます。 て丁度印材に用 るに大池がある、 けるやうに感じました。 えないのであります。 建物は自然に動いて門の側まて進ん 其邊は懸崖と云はず絶壁と云はず林と云はず到る處に數多の 麗に見へて水晶の如く、其他凡て目を驚かすと計りてしたが 長さ丈けても三丈餘もあらうかと見へました。樹木の宏大な 三丈もある就中蛇の如きは輪を成して首を擡げて居る其首の 宏大なる佛像や大蛇や獅子がありまして、何れも其大さは二 へて居ます、 ることは殆んど形容が出來ません。 てあります、 出來なと云ふ愚かなものが世にあらうかと、 道と云ひ崖と云ひ樹木と云ひ目に映るものは悉く蛮石 あり四方は凡て懸崖絶壁で老樹大木を以て蔽はれて居 の苦悶を脱れる為に却つて死期の近づくを待つばか 池の水は深さこと幾零とも知れませんが底は倚 迚も拙ひ館では夢の儘に細かい事を書くとが出 若し私に給心がありましたならば其儘倚麗に寫 ふる石の如く見へました。 池の向ふは又險阻なる絶壁で高山重盛と發 ・其家に入れは内部の何れにも自由に行門の側まで進んでは又奥に退き運動が紀門内深く幾棟ともなく壯麗なる建物が重門内深く幾棟ともなく壯麗なる建物が重 夫れより彷徨ふて裏手の林に深く入 十一時過に我れとも知らず 勿論何れも皆實石で出 私は跣足で其丁字 自暴自棄とな

いたが 3. て居る はない 來るやうになりました、神經衰弱は本復とは行きませんが神 更になくなりました。 てしまひました。 色々と分らして貰いましたが嬉しくて到頭眠らずに夜を明 むせびまし を解脱させて貰ふのであるが有難さてとであると歡喜の涙に を頂いたのは仕合せのことであった、 安心を頂くことは出來ねのである、 御慈悲を受附けなかつたのである、 と拜聴したが、 成れないことを自分で成らうと藻搔いたから苦悶したのであ は全く間違つて居たことが明白になりました。 した事が忽ち歴々と不思議に分りました。 極樂へ往くとは出來ぬのである、 から是迄御寺で聴い に不思議と思ふや私の心の中が大安心に落付さまし ら聲張り上げて御稱名を唱へました。すると不圖心が確乎な も膳へ方なく、 寺院の説教で腰々疑心自力を捨て、聞き信ずるの 自分は如何なる宿善がありしか知らねども、此 と覺りました。是迄如何程聽いても五里霧中であり のであると聞 不眠症はすつかり癒りました。 夫れに 一瞬間に於ける心の働きの迅きことは實に何 質に佛智の不思議なのには 今になりて思ふと煩惱に妨けられて不思議 自分の気が轉倒するばかりてありました。 私は最早彌陀の御慈悲を喜ぶより いたが、 た事など思ひ出 不思議なことには数月來安眠が出來な 夜よりは樂々と今に至り眠ることが 自分は最早此人生界限 不思議の御力にす 宿善があると云ふとを聞 佛道は必死にならねば 我々は生死界に流轉し 迚も學問や智惠では 是迄の自分の考 驚きまし つまり自分で ら生死界 がるの外 な た。夫れ 大安心 てある 尙 1 \$ 大 0 ~ 学

72 になりて死んで居りましたのを見付す朝掃除をするに付窓先を掃ひますと、 上人の報恩講に参詣したい考へからでありましたが、 に又國許へ参りました。それは丁度一身田高田本山に御開山 やうですが序でに申した次第であります。それから一月六日 普通より うとて二月二日の日曜に始めて参りましたが何分病 ました。 であらら、 お前は少しの間に失れ迄喜ぶやうになつたとは宿養の厚 お前は仕合せ者である宿善にも厚薄があるとのことであるが くる虫 日御休みであるが午後は來客が多いから午前中に御出掛けな ひましたらば、 が濟んでから書生さんに先生に拜顔を願はるしてせらかと伺 て朝晩く漸く講話の終り項を拜聽するとが出來ました。 何分其日は寒さが强く身體 されと申されましたから。次の木曜日に伺ふと思ひましたが、 聞かせて貰いました。 話の後て名古屋や其他の方々が見えてまして色々有難き話を に又々拜聴に参りまして有難自教を聞せて頂きました。 から殘念ながら得伺ひませんでした。それで第二九日の日曜 本山にも参詣し病氣の保養もして一月二十八日に 老母も非常に喜んて吳れましたから委しく話しますと、 七十五になる老母に私の信を得させて頂いた話をします 0 夫れから常々願ふて居た近角様の御構話を拜聽しよ 此上は後念が大切であると色々聞かせて吳れまし のは除り不思議と感じましたから下らな く虫などの來る所はなく 大抵毎日所々へ御出掛けになるが木曜日は一 ましたのを見付まし 其後十 の加減も善くなかつたものです 一日に少々書生さんに御尋ね の百足虫は憐れな姿 其上此の寒空にか 元來私の二階 身のとい 國許て 婦京し V 講話 話 V 0 0

告白しました次第であります。 仰せ下さるに た事柄に就 暫時の間御話しようとの仰せてしたから、 を承りまして拜顔を願ひましたが、長い御話しは出來ないが よとの仰せでありましたから、 顔して色 事があつて何ひました所が、 いて先生に大畧の御話を申しました所が、 々御示敬に預りました。それて是れ は、夫れては自分の其當時の心の有樣を告白せ 拙ない筆ながら弦に其大體を 幸ひに近角先生御在宅 失禮ながら直ちに まて 書さまし 先生の 0

故〉、名、為"極樂」、其、國衆生、無、有"一衆、苦」、但阿彌陀」、今現"在、說法、考、、、舍利弗、彼、土。何、爾佛土"、有"世界」、名。曰"極樂」、其、土"有、"佛、號」。稱時佛、告"、、。長老舍利弗"、從、是、西方過"十萬億、 受。諸樂? 極樂國土"、 國衆生、香

重、行樹了、 名,日前極樂十、 周匝"閩繞"、是、故"彼"、根楯、七重、羅綱、七 充二

又舍利弗

道了金銀瑠璃、玻璃了一个成了上了一有「樓閣」滿門其一中一、池、底、純,以一金沙一布了地、、又舍利弗、極樂國土。、、有二七五、池一八功德 "蓮華、大如心車輸入 赤光了白色"白光了微妙香潔才、舍利弗 極事"大,如治車輸入 青色"、青光了黄色"、黄光 玻豫神彈 赤珠瑪瑙十而"散一節",玻璃、玻璃、合成"上一有"機閣 如是、功德莊嚴之 之下池 水、 四邊"階

107

自超自度の小乗根性といふはこの事である。

如來廻向の念佛の功德には

今親鸞聖人は其

候はずといふならば、無理あさらめ、

力味心たるを発れぬ、

これなくして父母孝養のために一遍にても念佛申したること

講

姜

異

そのゆへは、 り、いづれもし 第五章 一切の有情はみなもて世々生々 (級) この順次生に佛になりてたすけさふらふ 近 の父母兄弟な 觀

念佛申 のりきみ心に過ぎぬ。若し世は無常なり無我なりとあきらめ を有せざる消極ならば所謂律法主義のあきらめ心、 らはされるのである。 絶對の 信仰に は必ず他の一面に絕對的積極なるものがあるからてある。 らめられぬものである。 ことが出來るといふ絕對的の大積極があるからである。 如來迴向の念佛によりて順次生に生々世々の父母兄弟を救ふ て涅槃の常樂を味はずんば如何にあさらめんと力味てもあさ さはどく絶對的に べきなり。 したること候はずといふさはどき消極的の言も、 消極も積 一面消極に言い放ち得らる、所以のも しかるに單に消極一面にして 親鸞は父母孝養の爲とて一遍にても 極もない。 さればてそ兩面に云ひあ 自力主義 積極方面 若し 他に 否

及相廻向の御力あれば、此一生を終るや否や直に大般涅槃に 及きことなれば其御惠を信受する外に假令父母孝養の為とて てに大に注意すべきことは兎角真宗の宗乗を教理的に考へ こいに大に注意すべきことは兎角真宗の宗乗を教理的に考へ では、別鸞聖人の信仰が其儘具宗教義なれば、一々人生 弊がある、親鸞聖人の信仰が其儘具宗教義なれば、一々人生 からひを挟さまねと絶對的に言はれた所以であると思ふ 恵を信ずる日上はたとひ現世で救へねども未來で救ふ、また 出一生の父母兄弟ばかりでない、生々世々の父母兄弟までも あを信ずる日上はたとひ現世で救へねども未來で救ふ、また といる絶對的の大積極の希望が輝き來 といるのである、此思想は絶大なる度衆生心である。

我等人道を行ふなど言へるものでない、唯絕對の佛の惠のみ は人道を行はんと言へる人道主義は眞の人道主義にあらず。 ふは無理たるのみならず、 極言せば偽善と言はねばならね。全體相對の人間の一個人が たる積極は力味心より出る無理人道といふべきてある、若し たる消極が無理あさらめの力味心たるかの如く、 皆其下に集る次第であるが、どうも絕對の立場でない、夫故全體近時、人道主義、四海兄弟主義が盛に唱へられて人が 唯人情として麗はしい、 人間立場の人道主義兄弟主道であるからである。 るのである、 等の根據ももたずして他のすべてを絕對に救ふべしなど思 にして、 精神上、質行上質際が之に伴は以憾がある、是 此惠は一切衆生皆平等なれば、 理想として高尚であるといふばか 寧ろ憍慢の態度である故に我こそ すべての人と 消極を缺さ 積極を缺さ

大菩提心なり是心即是れ大慈悲心なり云云大菩提心なり是心即ち是れ生を攝取して安樂淨土に生ぜしむるの心なり、是心即ち是れ衆願作佛心は即ち是れ度衆生心なり、度衆生心は即ち是れ衆

とある。

かく信心には常行大悲の功徳は知らず識らず父母兄弟を初め、自然に信心に導くものなれど、猶我等此世にあらん限りめ、自然に信心に導くものなれど、猶我等此世にあらん限りお、自然に信心に導くものは來る真の四海兄弟主義を理想的に實悲身に實現して澤尊の如く種々の應化身を現じて生々世々のよく、淨土に往生して正覺淨華より化生しぬれば、忽ち大は思ふ様に我はからひにて助くるごとは出來ね、しかるにいな世々の父母救濟を來世に歸して唯如來廻向の念佛を示されたのである。

まかとます。 神通方便をもてまづ有縁を度すべき で浄土のさとりをひらきなば六道四生のあひだ、いづれの で浄土のさとりをひらきなば六道四生のあひだ、いづれの がちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻

わかちからにてはげむ善にてもさふらはじてそ、念佛を廻

てない。言南無者の釋に即是其行といふは選擇本願是也とは 教行信證に凡聖自力の行に非ず、 佛したる功徳を自己の爲にせずして、父母孝養等の爲に之を めにせずして之を廻轉して他人の為めに側向せしむるとい に在りといふも過言ではない、普通の意義に於て廻向とい 佛である、 に於て選擇せられたるものにして、我等が自力で行じたもの て佛に趣向せしむる行でない、 廻轉して、 行じて我等が為に廻轉して我等に趣向したまふことしなる。 この意である。かく如來の本願によりて我等に與へらる、念 と釋せられた。 至心發顯欲生てある、我等自力の廻向が二十の願の至心廻 に廻向したまへりとあるもこしてある、此發願廻向の方向轉 施したまふの心也とあるのがてくである、 の釋に發願廻向といふは、 撰擇集に念佛は不廻向の行なりとあるによりて親鸞聖人は とである、 廻轉廻向の意味で我等自身が行 ひ積みたる功徳を自己の為 目である。 に於て廻向といふは如來廻向といふことになる。言南無者 他の爲に廻轉して佛に趣向するの意に非ずして、佛が 質に真宗の骨目である。 佛に趣向せし してみれば廻向の意義が方向轉換して、 是が廻向の本義である。 抑々親鸞聖人の真宗は此廻向の意義の方向轉 而して如來の發願廻向が即ち第十八願の至心信 即ち念佛は我等が行して之を他の為に廻轉し たすけさふらはめ、 むることである。しかるに法然上人 如來既に發顯して、 何んとなれば念佛は佛の本願 我等自力の發願が十九の願の 故に不廻向の行と名くる とは眞個に此章に於け 此意味にては我等が 願成就の文に至心 衆生の行を廻 我等が行 也 念 2

彌陀如 すてく、 樂無為涅槃の真質證を開きなば、直ちに還相廻 ずして全く如來の廻向なれば毫髪も我はからひを用ゆべきで あるといふも過言ではない。此點を切言したのが親鸞は父母 劈頭往還二種の廻向を以て淨土真 宗を 開かれ 向も還相の廻向も皆如來の願力廻向である是即ち敎行信證の されたのである。そこで浄土論の五念門も願力成就であつて 首、得、成、就大悲心」故云云とあるが、 群生海,行,菩薩、行,時、三業、所修、乃至一念一刹那廻向心、為 廻入して衆生濟度をすることが出來る。そこを、 てはけむ善にてもさふらはいてそ念佛を廻向して父母をもた る。其方向轉換の意義を明らかにしたのが 孝養の爲とて一遍にても念佛申したること候はずの断言であ る。かく味はひ來れば淨土真宗の骨目は此廻向の方向轉換に 殊に第五の廻向門は如來廻向の本源である。そこで往相の廻 生死海、無。真質廻向心,無。清 淨廻向心,是故如來矜,哀一切苦 惱 樂欲生である。信卷に、然るに微塵外、有情、流轉煩惱海漂沒 即ち煩惱の林に遊びて神通を現じ生死の菌に應化を示すい すけさふらは 由自在に遊戯するが如く衆生を落度するのである。地獄、 酸一如の境界は如來の來現したまふ都である、證卷に然者 應化身を示現して、衆生濟度の出來るは寧ろ自然である、 我等一たび浄土に往生して此境に至りなば、又釋奪の如 其如來廻向は往還二種の廻向なれば臨終一念の夕に極 來、從」如來生、示、現報應化種種身,也とあるのが是であ いそぎ浄土のさとりをひらきなばといふたのである 8 の言である。かく念佛は自力の廻向にあら 此廻向の方廻轉換を明示 わがちからに たる所以であ たば自力を 向の利益に

第六章

ないのほかの子細なりの親鸞は弟子一人ももたずさからか、そのゆへはわがほからなこともはめたる沈凉のことなり。つくべき終わればしなる、ことのあるなも、師をそむきてひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなんざいふこと、不可説なり、如来よりたまはりたる信心生すべからざるものなんざいふこと、不可説なり、如来よりたまはりたる信心生すべからざるものなんざいふこと、不可説なり、如来よりたまはりたる信心生すべからざるものなんざいふこと、不可説なり、如来よりたまはりたる信心生すべからざるものなんざいふこと、 情息をもしり、また師の恩をもしるなり。自然のことはりにあひかなは マ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるでわがものがほにとりかへさんとまうずにや、かへすんしもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなは マ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるでもなり。自然のことはりにあひかなは マ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるできな俳優ともがらいた。

たる信仰の光である。 寧ろ同じてとが言をかへ、方面をかへ、人生の折々にあらはれ る。かくの如く前章後章脈略が貫通してあると言はんよりは なりと反面よりきつかり言い放ち既に行者の行にあらずとせ 大行大善なるゆへに第八章には念佛は行者の爲には非行非善 者は無碍の一道なりと絶對の大道があらはれた。 念佛の珠の絕對なることがあらはれ、そこで第七章には 々四海兄弟の味が深くなり、益々全く私を離れて如來御催の 御催なれば、 はわがはからひにて人に念佛させることは出來ね、皆彌陀の 此章で親鸞は父母の為にさへ我力にては及ばね、况んや親鸞 も救ふことが出來ると仰せられた。そこで話がまた進みて、 來ね、其代りには佛の力にて順次生には生々世々の父母兄弟 をもておもふがごとく、衆生を利益するといふた故、第五章に ふともたすけがたければ念佛していそぎ佛になりて大慈大悲 に聖道淨土の慈悲をのべて今世に 章自ら其味の聯絡あることを忘れてはならぬ。例せば第四章 之を右より眺め左より透して其味を味ふものなれば、 ずることは出來ね。されど信仰其れ自身の珠は同一にして、 りと極端まて

響願不思議をあらはしたまひしが

第九章であ 此の如き煩惱ある我等行者のために起したまへる大悲大願な 直ちに親鸞は父母すらも我力にても今生で助けることは出 たとひ顕躍歌喜なきが為に往生不定にはあらず、 へまいりたさ心なさが為に往生不定にはあらず、 親鸞の弟子ではない、皆如來の御弟子じやと益 其味をかきならべたるも 故に一章の味が真實にわかれば皆分か いかにいとをし不便とちも のなれば、 分類的に論 かく如來の 却つて 前章後 いそぎ 念佛

教理的一般的に言ひあらはさずに、 なり、」「親鸞は父母孝養のためとて一遍にても念佛まふした すべしとよさひとの仰をかふぶりて信する他に別の仔細なさ らるゝ「親鸞におきてはたど念佛して彌陀にたすけられまる けて下さる。 言ひあらはせらるく熊が特に我等個人し 對の態度のあらはれたる言語である、前章に含はどき點とい はいふぞ、」「彌陀の五劫思惟の願をよく」 ありけり、」「さてはいかに親戀がいふでとをたがふまじさと ることいまださふらはず、」「親鸞は弟子一人ももたずさふら と云ふごとさ心地よさまでに一點の私を雜へず、半點のはか ムたのがこれである。念佛一遍にてもとか、弟子一人にても へざるものはない。 全體信抑は個人的のものである、而して よ、」「親鸞もこの不審ありつるに唯圓坊もおなじてくろにて るのである、 に親戀一人がためなりけり、」何れの言も皆著しき感じを興 も聖人自身の述懷告白の個人的たるが上に殊に何れも絕 猶次手ながら一言附加すべきことは歎異鈔は其味を へたまはざる言である。 すなはち常に親鸞、親鸞と御名を名のりて仰せ 四大海水一滴 はへば其酸なるが知れ 聖人が實驗的に個人的に ~に如來の御光を届 一案ずれば、 る如く 7

人ももたずさふらふ。 さふらふらんこと、もてのほかの仔細なり、親鸞は弟子一さふらふらんこと、もてのほかの仔細なり、親鸞は弟子 のともがらの、わが弟子ひとの弟子といふ相論の

知識の名を書して奥へ、又同行知識鉾盾のとさは其奥へたるを弟子よばはりをして、嚴しく取扱ひ、又從つて本尊聖敵に改邪抄によりて考ふるに聖人の御滅後當時自分所屬の同行

從て、 ば あれ、 念佛の兄弟として集つたものであるとのことすら明らかなれ などを生じたるものと見 える。序説のとき口傳鈔改邪鈔を 根本義たることを忘れてはならぬ。 化があつた。全體もとく、如來の本願の下に有緣の者が同 子一人ももたず、 引きたる中に新堤の信樂坊が聖人の突鼻にあづかりて下向の 本尊聖敦をとりかへし、又從つてわが弟子、人の弟子といふ毎 すべて是等の誤のあるべき筈はない。信仰が冷却するに 並位房が本尊聖教をとりかへさんと申したるに親鸞は弟 如來の下に如來の御弟子、 忽に間違を生ずる様になり安い、宗派であれ、教會で 本尊聖教は如來の流通物なりと思々と御教 御同行か集りて居るといふ

とまうすこと、きはめたる荒凉のことなり、ほしにあづかりて、念佛まうしさふらふひとを、わが弟子らはとこそ弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御もよそのゆへはわがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふ

てと、いはれなき事、弟子と稱して、同行等侶を自專のあまり、放言、惡口する改邪鈔四章には明瞭にかく記してある、

たまふところなり、しかればみなともの同行なり、わたくなり、からないのゆへは彌陀の本願をたもたしむるほかは、なにごとを、とのたまへり、しかればそのむねにまかせて、祖師のやほとのたまへり、しかればそのむねにまかせて、祖師のやほとのたまへり、しかればそのむねにまかせて、祖師のやほとのたまへり、しかればそのむねにまかせて、祖師のやほとのたまるところなり、しかればみなともの同行なり、わたくなり、というなり、というなり、というなり、というなり、というなり、というなり、というなり、というなり、というなり、

遺訓をそむくにあらずや、しるべしくして、あまつさへ悪口をはく除てとし、となり、その義な後をたいしくし、昵近の芳好をなすべしとなり、その義なしの弟子にあらずと宝宝 てれによりて、たがひに仰崇の禮

るしは、 師の真の佛弟子の信から來てある。 讀む時の心持が異りてくる。こは大なる誤である。親鸞は弟 一個の抽象的のものとみて、人生にあらはるゝ信仰の事實たを直ちに信仰と認めない、又敎理的に書きたるときは、世人は 中より我弟子と認めず、心中如來の御弟子と認むるからであ **異面目の言まで其意味を世間化することがある。親鸞は弟子我等は兎角世間的習慣になれて居るがために、信仰上の** ることを認め難い。夫故に廣略文類等と歎異鈔口傳鈔等とは もない、其代り是が真正の謙遜尊敬である。何んとなれば、心 である。事實を事實 通り認 むるは 世間的の謙遜でも尊敬で 子でないと確信して居らるしからかく仰せらるしのである。 しからば誰の弟子かといふに如來の御弟子である、これはか 一人ももたずみな如來の御弟子なりといはれたは、善導大 ごときてとを意味する。

聖人の弟子一人ももたずと仰せら の謙遜といふのは我等居るべき位置を一歩下りて遠慮する 兎角信仰が人生の上にあらはれたるときは、世人は其物 價値を引上げて人を世間的に尊敬したのではない、 、若し謙遜といふ意味が直に聖人の意に叶へばよさも、普 、ももたずさふらふ、とあれば、直ちに是聖人謙遜の言と解 かくの如き普通道徳上の謙遜でない、真に自身の弟 信卷の下に曰く 事質

章與佛弟子者、與`言、對爲對假也、弟子者釋迦諸佛之弟

事實によみたまひた。末燈鈔に御催なることを認めたまひた。これも善導の御文をたしかに稱へるといふことは、たしかに關陀釋迦諸佛の其人へ直々の聖人が常に認めたまひし事實であつて人が信心に入り念佛を聖人が常に認めたまひし事實であつて人が信心に入り念佛をとある、「ひとへに 彌陀 の御もよほしにあづかりて念佛まう

播取不捨の事

れまいらせたるゆへとみえて候、攝取のうへは、ともかくえて候へは、往生の心にうたがひなくなり候は、攝取せられらが無上の信心をばひらきおこさせたまふと候へば、零迦郷陀佛われらが慈悲の父母にてさましての方便にてわかが照上の信心をばひらきおこさせたまふと候へば、零迦がのはいるほせられて候攝取不捨のことは般舟三昧行道往生たづねおほせられて候攝取不捨のことは般舟三昧行道往生

の行者のはからひあるべからず候三五

みな同じことである。こくを「ひとへに、獺陀の御催にあづ 本願といふも、佛智といふも、 一一一部にの本願は佛智他力のさずけたまふところなり、」とある。 これである。 きものとして我弟子などいふは、質に言語道断、 りと仰せられた。 ふことは即ち本願の御心が直々に我等に届いて下さつたの 質に我等が信心の起るは如來直々の御催である、其御催と すとみえたれば、またく親鸞がさづけたるにあらず云云 往生の信心をうることは釋迦彌陀二尊の御方便として發起 てとはなはだしかるべからざることなり、そのゆへは親鸞 したしむるほかは、なにごとをおしへてか弟子と號せん、 る。上に引た改邪鈔の御文に「そのゆへは彌陀の本願を 誓願不思議、名號不思議である。此不思議の御力をな みな如外の御弟子なればみなともに同行なり、 念佛申しさふらふ」と仰せられた、質にてれ佛智不 一人ももたず 聖人のおほせにいはく、本尊聖教をとりかへす なにことををしへて弟子といふべき 御催といふも、攝取といふも、 不屆至極な

詳しく説かれてある、之を一讀すれば、如何にも明らかであ改邪鈔に正しく同行を爭ふてとを戒められたる條に此事が求うすにや、かへす / \もあるべからざることなり。求よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさんと往生すべからさるものなりなんどいふこと不可説なり、如ことのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念佛すれば、

つくべき絵あればともない、はなるべぎ絵あれば、はなるく

る。日く

侶においては凡夫のちからをもて、したしむべきにもあらしたひむつれんすれどもかなはず、いはんや、出世の同行等 かに、い て、 瑕瑾もあらはれしられぬべし、所化の運否、宿善の有無も、
 世間の妻子眷属もあひしたかふべき宿縁あるほどは、別離 だ、そのこくろをえず、祖師聖人御在世にある御直弟のな るなをもてかくのごとく嚴制におよぶ、いはんや人倫をも いてなやと云っしかればたと是非を糾明し、邪正を問答す れを遠離すること百由旬、 れなれば、 によることなれば、今世一生のことにあらず、かつはまた、 ざるほどは、あひともなふにたれり、これみな過去の因緣 つきぬれば、 せんとすれども捨離するにあたはず、宿縁つきぬるときは、 いはれなき事。
曾祖師
源空
聖人の七箇條の御起請文にい つぶべきいはれなり、宿善なき機はまねかざれども、 て、まねかされどもひとをまよまじら法燈にはかならずし 宿線善なる機は正法をのぶる善智識にしたしむべきにより わが同行、 もとも能行ともに耻づべきものをや、 づから惡智 もし世財に類する所存ありて相論せしむる歟、いま はなる 静論のところには、もろり つねにこのさたありけり、そのときおほせにいはく、 むつばらるしも、 べきにもあらず、あひともなふといふとも、縁 ひとの同行と簡別して、これを相論するでと、 識にちかづきて善智識にはとをざかるべき 疎遠になる、 したしまじとすれども、 いはんや、 とをざかるも、 \の煩悩むこる、 しかるにこのことは 一向念佛の行人にち かつは智識の 智者。こ 緑つさ 50

其如來の力を信する已上は、

我にそ

有無をわすれ、 6 いかん、しるべし。 くららが の照覧をはどからざる條、 わが同行ひとの同行と相論すること愚鈍の たすゆへ動、 一旦我執をささとして宿稼の 至極つたなきもの

味の信心に入らせらるくことは叶はなんだのである、 葉に當時の思召を示したまひてある、曰く も宿業なれば致方はない、 てしてなります。、聖人は即賃子等意大恵でさへ、一の事善悪みな宿業である。たとひ親子の間柄といへど 聖人は御實子善鸞大徳でさへ 御消息

も佛天の御はからひにまかせまいらせたまふべし、 ころの縁つきてもはしましさふらふてもはしまさは、 りおふらふ、 とものやふり らん、(中略)そのところに念佛のひろまりさふらはんこと 詮するところ、そのところの縁ぞつきさせたまひさふらふ さては念佛のあひだのことによりて、 けたまはりさふらふ、かへすん のところにてもうつらせたまひてさふらふてもはします いにもうしさふらふなるによりて、ひとしての御ていろ 佛夫の御はからひにてさふらふべし、慈信坊が しにならせたまひさふらふよし、 へすら一不便のことにさふらふ、 していろぐるしくさふらふ ところせきやらにら うけたまは ともかく そ いづ やら のと

ても佛天の御はからひなれば致方ないと少しもはからひを加 らひをさしはさませられぬ。聖人は噫弘誓、强緣、多生。『厄』 したまひし聖人は御質子慈信坊善鸞大徳が法義を削させられ 何にも佛天の御はからひ一つに打任せて一點も自分のはか

やうに御はからひさふらふべし云云 真實、淨信、億切。。更、獲偶獲。行信。遠。慶。宿緣。と 感謝

> ž やうに思ふと、人が信仰に入らぬといふて愚痴をこぼすやう られね。たどひ人に念佛をすしめるにも自分の力で出來る 83 末燈鈔にもかく仰せらた。 いかにも熱心のやうなれど単寛自分のはからひに過

いかべ候 るまひ ちかつくことは候へ、それもわがはからひにはあらず、鶸てのち衆生利益にかへりてこそさやうの罪人にもしたしみ悪をこのむ人にもちかつきなんとすることは浄土へまいり識同行には、したしみ、ちかづけとこそときをがれて候へ、 なきょり、このこくろはちこるなりと候めり、また至誠心 なんには、いかてかむかしの御こくろのまくにては候べき、みえて候へば、さりとも、まことのこくろおこらせたまひ往生の信心は釋迦彌陀の御すくめによりて、おこるとこそ 陀のちかひによりて、御たすけにてこそ、ちもふさまのふ とをざかれ、 のなかには、 てに謗法のひとなり、 んどしあはせたまふよしきこえ候こそあさましく候へ、す この御中の人々も少々はあしきさまなることのきこえ候め 浄土論と申文には、かやうの人は佛法信ずるこへろの 師をそしり、善智識をかろしめ、同行をもあなづりな り善知識をあなづりなんとすることは候はじとこそておこり候へば、金剛心をとりて候はん人はよも師らふ、往生の金剛心のおこることは、佛の御はからひ候へからんとおほえ候、よく/~案ぜさせたまふべ もさふらはんづれ、 ちかづくべからすとこそとかれて候へ、 かやうに悪をこのまんひとにはついしみて、 五逆のひとなり、なれむつぶべから 當時はこの身どものやうにては 善知

おぼえ候

善さも悪しさも佛天のはからひなれば我を離れて人に従ふと になった。一の蔓を引けば全體の信仰の脈がみな動く 次生にたすけるとの仰せ、こゝに至りて前の章と同樣の覺悟 には此世では助くるとは出 所で信心に入るやら又歸り來るやら分らね、 自分の力で悪人をたすけんなどはからふではない、 ひに任せ奉るより外はないこ 心に入るやら又歸り來るやら分られ、皆如來の御はかむにも及ばず、一旦離れた人でも何時宿緣が熟して他 來ずとも、佛の御はからひにて順 其代り かく

をもしるべきなりと云云 のことはりにあひかなは、佛恩をもしり、 また師の恩

所率を初めとして一念多念證文の則是具足無上功德の釋、 はれてある、 とてある、 信鈔文意の觀音勢至自來迎の自釋 つを引かば のことはりといふは、 自然の文字は聖人晩年の假名文字に殊に多くあら 銘文自致不退轉の自の釋、惡趣自然閉、自然之 すなはち如來の御はからひのこ みな同じ意なり。 最後の 唯

つみをけしらしなはずして善になすなり、 はは 力を信ずるがゆ のはじめてとも 切とつみを善に轉しかへすといふなり、轉すといふは、はじめてともかくも、はからはざるに、過去今生未來といふはしからしむといふ、しからしむといふは、行ちのづからといふ、ものづからといふは自然といふ、 ねれば、 すなはちらしほとなるがごとし、 はじめて功徳をえんとはからはされば自へに如來の功徳をえしむるがゆへに、し 功徳をえんとはからはされ よろづのみづ大 彌陀の

> 然とい をたり、これ自然の利益なりとしるへし。 悲母の方便によりて、無上の信心を發起せしめたまふとみ、いこるなり、この信心のおこることも釋迦の慈父、彌陀ののくらゐに住すといふ、このこころなれば憶念の心自然にのはからひにあらず、金剛の信心となるかゆへに、正定聚 御ちかひにおさめとりて、 ふなり、誓願眞實の信心をえたるひとは攝取不捨の まもらせたまふによりて、 行人

とある。 を義 はからひをすてるといふは如來の御はからひ、 まかすといふことは決して見捨ていしまふことではない かせよとの仰である。 を得ることなれば、いかに師にそむけるものでも必らず佛恩 とは即ち本願のことである。 師恩をしる より自然に念佛流出で、 自然はすなはち報土なり、 にあひかなは かく如來のはからひにて信心のおこることを自然のことは 信は願より 和讃に 和讃吳書、 の御化導である。 とすとの釋に至りては自然の一言で何もかも包容せらる 本願の自然のはからひによりて、自然に信を得、 自然に無為涅 40 生ずれ うになることなれば、 自然法爾法語は此意を示されたる實に聖人の くと申されたのである。 一寸注意すべきは、如來のはか かしる如来の御はからひによりて信心 **製界に入り、** 自然に必定に入り、自然に無上の功 殊に末燈鈔自然法國章、 證大涅槃らたがはず、 念佛成佛自然なり、 唯々この御はからひにま 自然 この如來のはからひ に衆生濟度に 即ち御力を信 BUR 義なさ 出づ

の心をもつべきてある。末燈鈔にいる佛喜べかしとの憐みむくとも、心中には信心に入れかし、念佛喜べかしとの憐み

この信心をうることは釋迦彌陀十方諸佛の御方便よりたまた。ことなし、餘の善根を行する人をそしることなし、公の信心をうることは釋迦彌陀十方諸佛の御おしへをそしるはりたるとしるべし、しかれば、諸佛の御おしへをそしることは、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するたにも、一つで、おきことは、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するたにも、この合うで、あはれみをなし、かなしむことにてさふらへまる。他間での御ちかひのなかに第十九第二十の願の御あはれみにてこそ不可思議のたのしみにあふことにてさふらへまる佛恩のふかきことなし、大涅槃のさとりをひらかんこと、佛恩のふからひにまふすにはあらず候ゆめく、

如来のはからひを信ずる身のいかて我を捨て我を誇り、悪句然に今迄離れ背さたる師の恩をしるやうになる。御一代聞信心を發起するやうになり、自然に伸起のふかさことをしり、ちちに自然のことはりて我に背ける人も釋迦彌陀の御力にてらちに自然のことはりて我に背ける人も釋迦彌陀の御力にてらちに自然のことはりて我に背ける人も釋迦彌陀の御力にてらちに自然のことはりて我に情となるのである。我等の力で惡を憐み、敵を愛する心など起るではなけれども自然のことはりてかくなるのである。また其情心を發起するやうになり、自然に今迄離れ背さたる師の恩をしるやうになる。御一代聞自然に今迄離れ背さたる師の恩をしるやうになる。御一代聞自然に今迄離れ背さたる師の恩をしるやうになる。御一代聞

候へば、 うかみ候と≤H²而して御中陰の中に蓮宗も寺内にてすぎら きっその時、御前へ來り、 成とも御もらしなさことに候と、仰せられ候て御赦免候ひ 送間敷事をいよぞとよ、心中だになをらば、 れ候。御兄弟以下御申には一度佛法にあだをなし申人にて 候へども、 はなされ候。 人、ふと仰せられ候。安婆をなをさうと思ふよと、 安藝蓮宗、國をくつがへし、くせごとにつきて、御門徒を 候 いかとと御申候へば、仰せられ候。それぞとよ、 とりつぎ候人なく候ひし。その折節、 前々住上人、御病中に御寺内へ参り御詫言申 御目にかいられ候とき感涙聲 なにたるもの 前々 仰せら 住上

てある。 まる宗旨を形作りたのである。即ち御弟一人ももたずと宣へ 來の本願を信じて一點の私を加へたまはぬ故、一天四海に廣敷化の意味が實現したのが宗旨と云ふてよろしい、即ち唯如 やうになりて師匠の恩も喜ぶやらになるとの仰である。 はりにて一旦師にそむさた弟子も金剛の信を待て佛恩を喜ぶ ゆへ如來のはからひにまかして佛恩を仰げば、 顔にとりかへおんとするのが、非常のはからひである である。如來の御催の念佛、 引ける改邪鈔の文意を以て 蓮如上人は 御文 にかく 述べられ る聖人の敎化には、 これすなはち、 n 抑々弟子爭などするものは、 自然のことはりにて、 十方衆生弟子たらざるものはない 如來より賜はりたる信心を我物 此佛恩師恩がしれた 自 然のこと それ 此御 0

故聖人のおほせには、親鸞は弟子一人ももたずとこそおほ

問御同行とかしづきて仰せられけり。 せられ候ひつれ、そのゆへは如來の敬法を十方衆生にときなり、さらに親鸞めづらしき法をも弘めず、如來の敬法をおかしむるときは、たじ如來の御代官をまうしつるばかりなり、そのほかなにをも同行なるべきものなり、これによりて聖人は御同間御同行とかしづきて仰せられけり。

如來の御はからひ其儘を代表する所以となる故に、 識の間に聖人が本願の對手たる十方衆生に對して、 後悔すべからず候とある聖人の態度を、十方衆生が亦聖人に との一言が、 た次第である。 此章と同意ではあるが、「如來の教法を十方衆生にとききか して取ることしなる。「如 すかされまるらせて念佛 を聴聞する十方衆生は何人も聖人の弟子たらざるも とならせたまふことになる、一點のはからひを加へざるは、 むるとさは、 佛恩其儘に師恩を感ぜざるものはない。たとひ法然上人 仰ぎみれば十方衆生といひ、 師主知識の恩德も、 如何にも謙虚一点の私なく申された。そして我 たど 如來の御代官をまうしつるばかりなり 方衆生が亦聖人に對する讃嘆となつ して地獄におちたりとも、 來大悲の恩徳は、 ほねをくだきても謝すべし」 如來の代官と云ひ、無意 身を粉にしても 聖人の敵 如來の代 おらい のな

慶

漢

十無爲涅槃

でも、涅槃を以て極要とするといふことは動かぬところであ 南方佛教も、今日研究せられて居る原始佛教の阿舍等の經説 ても肝要である。大きくいへば大小乗の佛教、邏維緬甸等の ても肝要である。大きくいへば大小乗の佛教、邏維緬甸等の でも、涅槃を以て極要とするといふことは如何なる宗旨に於 ても、涅槃を以て極要とするといふことは如何なる宗旨に於

身も亡び心も滅しるのが佛教の目的であると云はれて居る。 所謂大乘佛教徒の方からは、小乘教徒の涅槃は灰身滅智身心 現今の西洋の學者も佛教全體は無に歸するを理想とするもの 教以外からは、佛教の涅槃といふは虚無である、寂滅である、 滅の字は火を吹き消す義であるから、其點から誤つて古來佛 滅とは唯消へて亡くな滅であるとは云はぬ。 都滅であると云ふて居る。日本支那の佛教徒は概してこの大 であると考へて居るのみならず同じ佛教徒の間にありても、 てあると云はねばならね。第一南方佛教徒に就て彼等の信ず 從來涅槃といふ言辭を滅度と譯して居る。ところが の意義は如何と尋れば、 の説を踏襲して居る、 なることでは、然らば滅 されどそれは甚だ誣いたるもの さば何を意味する。 無である、 するのでとい

ある。 ふかんる、 脳ふた³ 小 誣 72 なは 烟 T 3 0 S 乘 N 15 て、 居る、 た 25 0 な 0 迷の火を消 君の云は ふて 0 72 V から かっ 7 V 静寂に 17 徒 一般とは 5 0 2 4. それか 4 居る 0 風が 火が 大を消しても悟りの蠟燭は殘て居ると積一消したるが如き狀態である、火は消えて云はれるには「彼れ南方の佛教徒は涅槃」といふ其時私の講義が丁度「涅槃の靈境」といふ其時私の講義が丁度「涅槃の靈境」といふ 其時 7 0 北. ては 律され あ L つて來た。 撃は さは 3 て上輪 2 止風 洋を巡回して、 主義で な 聞かされた、原始佛教の涅槃も唯消へて仕舞したところであるといふ様に云ふて居る」と、 の心が ら北方に轉じ、 あ UD は 2 滅と 為に V と立派に燃 全く身を灰にし知 かれら 信 、それ 51 その 生死 韶 亞米利加 V 5 5/ 4 ふは火そのも を消 に取 250 0 人に私は過日 境界因緣 彌陀念佛 滅。す ^ = へて 上る如 つて、 する工 のであると断ぜんとする 更に又轉じて て佛 ンスタン ふてとを以て 大乗教徒から は多 未だ 主義入られ さを滅と 合に 0 ふのだと思ふた 十分 風に 一种戶 チ 一意味ある 滅して仕舞 \$ 17 と積極 涅槃 煽られ を話 に於 0 だ えても蝦 T の研究を持ち たてられ ら見 いふたの ふところ 仕舞 i w. は T 2 然上人は から印 2 て、 的 2 南 たの 3 3 T よのだ 7 کے のが ふの 17 燭が やは、ななな ^ 0 遺 は てあ のて てあ 人に 方を 0 0 72 あ 5 止 殘 蠟 ¥2 2 0

あい明のな、浄、湿、つるが湿、る、絶、喉、て ふっはい煩。蝶を、極いにいれる情で、四、的、 いるは大に佛意を失へるものいるは大に佛意を失へるものいるは大に佛意を失へるものいるはなりと捨てし、一切があらはれ、大樂の境界が開かるらなれ、大樂の境界が開かるところで、そこに加いるところで、そこに加いると 之に がにいる一、彼い間が如の切れ 3 け。來「て、何、小、乘。 來、常。あ、物、乘、教。 る。住るる、も 'の'徒⁴ 0000 滅`徒` は ての光の真の無、 11,

カコ 私 3 は 歷 ---Ħ 更. 的に に及んだの 12 奎 THE てあ 72 3 0 がて 13 歷 な 史的に 研佛 꺞 教 L 0 T 唯 本 \$ 此思

2

119

死の中にあり乍ら生死に落ちぬが大乗の理想である、我等である。性がからいから自から光明を出るならば、地心力信仰は即ちそれである、大平和大安樂の涅槃を悟れるにはあらざれども、の手にあり乍らなは、12撃を悟れるにはあらざれども、一番である。所謂能發一念。ならば、此心力信仰は即ちそれである。成等である。所謂能發一念。ならば、此心力信仰は即ちそれである。成等である。所謂能發一念。ならば、此心力信仰は即ちそれである。ならば、此他力信仰は即ちそれである。ならば、此他力信仰は即ちそれである。ならば、此他力信仰は即ちそれである。ならば、此他力信仰は即ちそれである。ならば、此他力信仰は即ちそれである。ならば、此心方になるならば、此他力信仰は即ちそれである。ならば、此他力信仰は即ちそれである。と

ぶ勿し ある 彼等が は、釋之と同 2 T 悠火 火を持て來 0) 火 12 が 我 0 あ 亡ほお は 五 上 12 4 3 ^ がつ 如 1% F. 32 0 火を拜するを教化し玉はんとて、 彼、 っそれを律法的に一 郊水があ 7 17 1. 6 0 三を取 る 7 N ガタ べからずと 葉に對いたの る、 E の心に いなとかい てあ T さる であ は慾 の説 V 3 T 方から、佛説 の説法 汝等 П べからず の火が燃 にも 如 21 一次であ 於 の我を友 ても、 に、本。たて、來。如 、殊の如 又釋奪 へついあり 心に 是 力言 3 あ 0 直にそこに と云は 3 3 慾を起す て、ので涅 既の大°來°の、皆、起、多、、 灑°說°和、のに阿°慈°釋°て、嫌、し、く、同°き°き°あ、爲成舍。恭。尊、之、は、て、の、じ。玉。玉。り、に あ "涅"槃 云はれ 涅 de 17 3 目 0 0

來尊此る滅が事。 身、如、入、て 、水ら、ある、ん、る 撃して 寂 心を示す 經を左 を示 は温泉のの とする大連 で を する大連 で りは、滅す を説 し玉 3 あるべき 2 3 玉ひ と皆志 ふこと何そ甚 3 72 、槃⁴の 2 速かなる」と 'の'有 人と甚速 る。活ふん とであ 一葉である。 は逢も離る 30 75 る、 是に於 V 是の ふて慟哭し 如 來は 行`如 は T 野した。他大燈灯なり ぶくるも **盛者** 釋奪弟子 大 如来常住無有變なるとなし、法なることなし、法なるとなると、法ない、法 爱會 5 弟子と 我定群 の為に 如釋

ていす、は、かざ有 W 0 往りと、は、佛のとなったといれ、といれ、といれ、といれ、という あ ほ ども、 30 \$ 婆維 無為涅 が待しってものであって、からない。その無為は、すりないであって、あるのに、あるのに、あるのに、あるのに、あるのに、あるのに、からない。 仰 隻 0 の如しと世界は すの樹 101 i 彌 陀佛 るで温。亡。/ で我。我 1.120 今 至 他 1 0 あ 6 天 0 7 7 來 3 尊台 來 は るのがっに、如いじ、さ 。平がで、水・喜いて 17 云 \$ る 理生かって、る。 は、ん、色、有、あ 経 於。と、身、様、ら 肉 こと 皆 ふて 身を致 - 4 0)

從 のなって金額 す 0 分 水 卷△る○り○法 來佛方 W の來 大かが意義 過 教を解釋す るの色 こうはかだぎ みの 身中の ね 04 方便を 悪よ のい云 0050, ~ ありはり三 は 6 難 るの色の徳 あ 却 S からし、 廣身△門 るてて大言 らしいるに、除りになっところに種 大なる。 -- 647 椒 樂に Ki 生机 色か解 V のむ除 3 力 ヤし 境しし 境を云ふたったのと幾つ 客觀 畢^cが のい如 一種々無量の 形容が見へ 形容が見へ で子のために も善巧方便 になったが、 今の法身を とにな ての要 的 は身といふ言解、或はを下し玉ふとを云い 13 後のすって はつる たのでのに 巧方便確 小CIC 3 ~ 過ぎ ての肉のも ず、現の せ 減0件Cて 其 72 方 化"少 るりはりけ 胨 辭、或 方べ 為 2070 便 20 便など TO 至obc真 ズで云 とは 親 办 然悪・人でも亡 るって「質 N と却て と、正、證 あら つま 定での

る0 是0

11:0

身のな

とあっ

00

500

133

~○藥◎ 初ってい 迷のあ 6 003 Do 衙 * 離っつ は を にれい無® 6 3 とる 72° FO 72 境°涅® SE SE る やらな 界口酸象 とも は てつはの 0 あ。即。 n 度 3 ds ार प्रा 5 5 72. み 大 な法 3 身とまふす とる 寸 御 0 さ. 名

うの諸の様ののひと に。解。は、一、いC法のがの境の云 仰、ら、解、躰、ふでの、質・界・はせ、ね、ら、真・佛、真、相、て、れ 眞の相。て、れ ら、が、ぬ、如。境。相。ていあいた 一つしての界の即の氣 300000 ・佛ののりい 我"智"境。法 なのにののと 命の見り具りはり 終物質。佛 れつるのなのの。 はつ一つるつ證の この切り有りりり

示大章⁴特。は、ね。 8 か 3 1: 0 3 頭彼れ、のと界はある。そ 0 4 法のなるないはない、法でる をあら は、は、る、 でも摘 章で h て云 の 御, し, 口, 境, 。 5 て空字 鑑、て、計、界。 に頂りは 藤に ないでは、 を解 な、其、 る'そ'つ'境' 至 自一の、て、界、 3 まで て然"有" 0 21 、法⁴様、實、到、 廣爾⁴を、際、ら、

のの自 法ては はかむ 6 は 200 NB 3 71 0 0 か 5 3 如 6 か V 17 の響に 人 L 5 0 L 語か 0 5 T と思 £, ある 5 T N V ふことは か放 0 3 15 を法 あ 12 110 法4、 5 然 E's 爾△行 ٤ 者 707 5 000. 0 V 12 常り

15 0) 空に 水

> にてがのてかの、歸、ら、識を自りう 定め出まり來 て必て心心在經 家 れ、の、慈、れ、は、上の聚合分のて 必 業◎無成◎に しあののの 文 を、て、悲、る、、 222 部 3 至 を出 るの頂で心 0 を出っるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるのであるのが、これは理なるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、直になるなり、 意 B 表 たの歸到 波 けり持 5 をのて 度 12 歌 たか 面 る 00 を を含まる は何時で は何時で は極る ときない 名は 正るあ 12 通迎 2 見 定する 之をのタ * * 1400 2 17 T 12 聚△∪ ^ 要す 5 T と今るの 定な T 3 \$ であ 187 まるる 3 4 る て、心、こ、の、往、來のの。い。個、 ふり然 歸 21 7 な あ 以 7 3 あが有い口つる。處ってって る、親、難人ている。たの居のは、 往では はれる ---000 Ŀ な 面 2 生を導 "此"る 法 子 21 なる 0刻 生れた とて 平10 21 M 0 V あり現りいの相 \$ い、生、生、この歸 飛 H 0 い許と、鐵るなでの内のいよへ喜窓がは、心。 るの生家に 方 猶 あって 7 九 は 17 。現生正 あ 豫 な 0 た、れ、成、をいに許 7 11 す 於歸 意志さず 扇、ぶ、の、て、佛、早[®]の。全、 親 かるあ W 四,加,加。間 0 と答 な つ、一、中、命、陀、やの味のく、 許 らるれ てるる で、モ、得、得の違 迎 6 ない とも て、念、に、終、御、死。か、信、か、あ、る、親、後、ら、の、滅、っ、の、滅、云の、 の親刑 監 `1 '往'往 は N ^ 0 あ 定級と きの未 獄を出 再'生'生[®]無 ガ: 踊 通の期 あ 玉 湖 つて 家流 終のにり、 來了資 id あ 3 N よ、親、て、り、御、度・へ、質、 SE O格 0 0 V 往では おれ 居る つで在り意 闘 ち ~ あ 7 の本 2 な心臓の 生在 3 T あ こった。赤 せきる ことは ところれない。監獄 と。於り人なっていか 成。監 72 \$ 0 願 の、届、の、庭、よ、をで生るる 佛中 佛のにき 無は、 72 は てい、親、へ o佛 現 上。來、た、平。の 0) 1.

にかを常てら繰れれ が 返、味、て な 一名あ 何し、深、見 L 向 ていいれ 5 12 居、成、ば、 上れて然 ブご 15 のの、八、人、 \$ 0 信で、ため、 申衆 # る、蔵、ア、 をあ あらは、かいせら 佛か道 5 然 O) h 1t し上否れ 悐 て人命、た 迎 居の終語 12 0 法 0) 72 はい、師、戀。 道れ れるのまり、次のまり、次のまり、次のまり、次のでは、非 理には、 17 C

も悪 2 とのみの南の頭の自 もったの無の陀の然 おりまり回り佛りと なののの酸のひの はいたの陀の御りよ ぬっるの佛の響のは をいたっとっつると となりて、行きとよりしかった。 誓 8 我 心に すだからいからというというというというというしょうんかからいい 受 ける 相 とっていること さるとはなりにあらずしているらいない。 かっ えのはってのり、 h

たのまったのと といふたのでならしめんならしめんならしめんのできる。 ししんcて かきすっとcあ たのすの哲でる 50. 000 までかる玉の L@72@~0 まっちゃなっ 767090 Lolo: めですの無の すの20下の

2 5 0 公云 75 力 ころ ふて、 然で T は 極樂 7 あ 3 0 0 言僻 Di 0 無為 方 同 自 自 3 H 然 22 7 0 あ 字を 51 3 3 は 0 意 カンカン 5 32 は 2 異 T あ 3 つあ ٤ 3 V る從

さて

腦

びけ

飞

あ。願。本なる。力。なる。自。 自然のはのは 私か去る三十七年の夏、 かの外で らいはので によって極樂に往生する、で既大の御惠であって、そ 當地に於て観世音菩薩の像の 20 ・始終皆自然で その御恵の力即

登を作つた。その中に

熟然去來到彼岸 人生百年光悠々

涅槃界へ入らして貰ふのである。 花は最後には海にまで送らる、如の願力にいろ ⟨ と導かれて、大 ぼたつと谷川の清流に 水である。 太 おれる 四 句を聯ねた。 かって、なれる 000 北谷川の この二 '谷'川 水が にまで送らるく如く、我谷川の水に花の運はれる。 我等を連んで同じ無為涅槃界に入らしむないに花の運ばれる如くに、我々は熱には極樂無為ころとをある。谷川の水は願力自然、海のなってある。谷川の水は願力自然、海のない、ととれた涅槃に入らざれ、佛は無為温樂無為のからでのである。谷川の水は願力自然、海のは、治のである。谷川の水は願力自然、海のは、治のである。谷川の水は、北々は如来に、北等を連んで同じ無為涅槃界に入らしむ、海ののののののである。そのののののののである。 我®と 落ちた、 その意味は、 それ か流れ 山間に それが海へ して 咲け 渺茫たる 3 我々は如恋出ても同じ の花

なはらいまりて和 士なった。 大学はの讃ん 證大涅槃 うたがはず 念佛成佛自然なり。 ずっ

なり 為の 5 は本願力によりて發起し、 土に入る、 ふ言僻に、 これ 直に自然は即 が自然法領である。 信仰の念佛を喜びつく極樂無 ち報土な 乃て念佛成佛自然 EU つかけてあ

50 をしらせんとて 初めに爾陀佛とて

> んのそのれのさの うなりのなら CN3 300000 20 彌陀佛は自然の 100 5.0 としらせ

全く ・證悉に 、十切成道を唱へたるが阿爾陀佛である。是 ・ 一切成道を唱へたるが阿爾陀佛である。是 ・ 一切の水も元は海水より來るが如く、一如 ・ 一切の水も元は海水より來るが如く、一如 ・ 一切の水も元は海水より來るが如く、一如 ・ 一切のでででする。恰も海水の港然た ・ 一切のでででする。

玉ふなり 然れば開陀 如 **兆**、 如より 來生して報應化種々身を示現し

無碍光佛を示してぞ **外遠實成阿彌陀佛** の大夜をあはれみて 安養界に影現する 法身の光輪さはもな

τ, 此机對界に 釋迦牟尼佛 迷ひ を示してぞ 法然上人 10 ある 皆てれ 伽耶城には應現する 五濁の凡愚をあばれみて 絶對の境より顯れ て絶對界に歸つて下 來つ

さる ある。

噇

脉

信 濃

左 千 夫

ねもころに我れは通ひ 山七重長閑に越 とごくろに戀ひて思 篠みすず刈るや利鎌の つか のしなへ乙女に 燃て たけ年の八とせを ちな 2 へば ^ は

冬され つが 丈夫が戀ふる心は 百 0 岳八つ尾の峯 はみ写は ば紅葉に はつくじ花咲 T 心は千重に むくがも知らに 嘆く つめ

母

子をもてる人をし見れ へりし吾れ ば誰も カコ も年老 v. た りと思

風

耻 なりにけ カン しき心をも 5 T たらちねの母と云はる し身と

包まる ろこはしける やすらけく事す いちき顔に目 を開き瞳動 かす何を見る

みに

しを吾より

36

V

72

くるそ母

Z)

5

く笑へとし思 かずあ 12 ば 如 何に と顔をのぞき見てにてりと早

の岸うつ波を安房の海のなこの池へにけふ聞ける哉 山ながら我かほとけにたてまつらばや 行 もはてい花はちずかな あれば

六價 税士 五 遊遊 光に満つる新たなる世界に出づる地域書冥想にのみ耽る一青年は理想の意味とは、
連命を破つて邁進せむとす
数通 はい田舎道を歩いて居る がしい田舎道を歩いて居る がしい田舎道を歩いて居る がしい田舎道を歩いて居る

日回 號日 行行

說小

井

甲

よって虚が心の影像を

に向つて根本的出たが、よりの見地に立たがける意義を論いていた。

と寫毫の 即

治

び及寸學

三每

月月

象徴派と

篇に就て詳細の評論をなす。 一昨年死せる佛蘭西詩界高 る現代の詩界に投ぜら派といひ紛然たる外部 VZ の北彩に岐惑いの王人が日の光彩に岐惑い 也せい知

文寫生 刮

漱石 讀をて評碧 す知俳論梧 今 \mathbf{x} でき文字也でいる作句に志すものの理想を啓示せむとす俳句界の新傾向を論じれる文字也である。の及作句に志すもののが、一句の理想を啓示せむとす俳句界の新傾向を論じ相氏選「日本及日本人」の俳句を総 べら旬し桐 新 信綱柴舟 9 氏 作抒 ッ 0 自然主義を排 大合 中 情詩三篇 味説 0 Ħ 甲を常を難音評

Ш

ののじ縦 し 超進横字 一勢んに 之

論評告威與 っせ化謝 日本俳響品子夏目漱 の短歌寫生文小説な概石二氏の作を批響 評 田山

一小吏は只隣人心からのといて居ると自分の身が悲笑つて話して居る 一人

論評す生假明文論評 文版中文語の 文版が表現を でであるなさの でなったが、 でであるなさの でであるなさの でであるなさの でであるなさの でであるなさの でであるなさの でであるなさの でであるなさの でであるなさの でである。 €排 甲

家に警

#番十五町木駄千所行發 込駒區鄉 堂春盛 屋田 Ł 堂京東 所捌賣大

てる也訓れ昨に君んのをだ方じざ面はをる疑寺訪に他と々に狀沙 宿にとを、年日真は懼な方位たる談一爲人爐內公現に謂記佛徑白羽 院 水 宗理市局かのと剛志一局記も所殿しゃ和ためしかた理問を に山を絶る教 徒闕ら、せし人念え之、謝て何肌ま傳、如びむき摩 同房絶對こ行然の心ん曰ん 語のずを會、佛れをふ道故し下所目河 朋夜對信と信れ作すとくと之り牢、訪後靈恩も裂をもに、り光の畔 と靜に仰を燈は法べ、母 をて乎旦ふ亦光の健くのな此真てを醒に 共か信の得を如とき家病果中日と暮の燭徹甚在がみし郷個よ見む於ににず行ざ引何して人むし止くし之機を透厚、如見、ににりずるけ 多寢る者れけにてと聽もてせ てに會剔せを會し奉唯於我 んがる 'るし此あさ 母ら我動遇なりる語員 'る佛けが羽は如村 河即のに吉中で事ら感我病る家かへか膝相る何同、陀る信村止き落上くは此良に此をんし死あべ頃ざるりを互、れ明一の信仰求ま心に いしの 門室中さをるやあ問所陀にをりを得て、るふ信在 語も念集林年法慣仰る 16,00 、如くる尊より寺が附も上と数で水 、るふ信在ト佛ト いしり來にりになのと年 至同 '感ざと答かて此せ者の者其(も りし数じれをにと曰のりの慈曰最相外昨、湧る達に人く理本來人族同くへたの得曰、く如、言悲くも遇濶年講さ、る之の、想誌此亦り、明しざる祖ざく答、〈何識何、咸はの中話出團」を上亦郷屢地直り、 同くへたの得日、く如朋しざる祖ざく答、く何

大石來岡明信を氏りてく地に毎 悲見聽師に仰せはて師、よ今年 のよせ範接をら廣二が今り年一 供りら数す告れ島十信回態は二 恩來れ授る日次の年州眞々毎三 譽のしり同來を宗來會月 威入中出想 、行質告大ら滿の 謝舍柴豊あ人又岩業白學る堂頃 しせ宇吉らを二室上せ講\ はい 來ら一氏しし十源一ら師人益、求 るれ氏砲むて三四のれとあ々い 其何は兵、浄日郎間、なり室つ道のれ周工本土の氏違又ら、のも曾 他も防敵號を信をな尾れ九狭求態直よ中告見仰紹か張し日き道 々摯り佐日る談介りの、にを管 求の來光にが話しし青住は歐來 道態京井具如會てを木田臨ず總 に度せ香大くは' 蔵兵智時るの 來にら氏要、原氏泣二見に甚人 る党れ等を又直にし即師信だ多 人之中は揚直次遇、比は仰しさ 日ず森毎〈接郎へ又は本談、時夕合敬會又攝氏る塚信願話又季 助掌信熱其取稀質本仰に會全也 るし氏心他の有驗大につを図。 多てはに福光の談愚よき開各特

仰日き會てれ仰生し島力す日をで會 〈和寒活之のく問て襄を、安開大を二 、の月動を所に題二氏致安藤く傳行月 十暖にの聞に至よ十此す中氏「道ふ十 六に歸人ってるり年地このと加を、五安 日、りま、も、求來よと地共藤行予日朝小て基青滿特道佛り最小に咄ひ三、中國伝、皆年異にの始出の始上の大田

朝小て管海場に関いる場合を 南端にの数出る恰上室、年では 京談信の数出るとの 京談信の女で回題中をか初出安中に年来 京水徒人と同のるをが初出安中に年来 日の名をではいるとした。 にはいる。 には、 には、 にはいる。 にはいる。 にはいる。 にはいる。 にはいる。 にはいる。 を造さる、言はりし時での十二した中 開し宿を老一非でが基、氣五氏で本佛 くてり呼を例の原近数ト、の出催け表 で人句常、、

で人句常、、

で人句常、、

で人句常、、

で一個

で

で< . . 8 問紀をに一りの舊いに近日にはす收佛歩し精播整加傍よ於 處 修は夜ずるめ陀をも神の夜はにりて の講は、の、の進 。熾時講る講十釋 大除霜特威毎大め反也教話 悲小のにを會悲、動 育を 悲小のにを會悲 育を十演日涅 を春如社以何を人と新に爲四説ま蝶

送ら

て、

六版

最

金八拾錢 日ふ 小包料八銭製がなり むること五 渾なる

新

五三

する者、佛教文學の何たるを知らんと欲する土は須臾も離す書は佛教信者の家庭に必須なるは勿論、佛教研究者、布教家、 、一体教繪 ざる大描

刊

鼎 著

再

多

圓ス 五綴

に現代の思潮に映じ來る其清新の奥義を明にせり。苟も假名を讀み得る程の理及其歷史悉く此に示さる。本書は其譯文を掲げ平易に一偈の字義大意を講 は著者は更に初版の 著者は更に初版の上に嚴密なる訂正を加へ、更に附するに丁寧なる索引を必や姓に斯道の靈旨を領得すべし。初版既に盡きて今回第二版国來せり。二現代の思潮に映じ來る其淸新の奥義を明にせり。苟も假名を讀み得る程の 力佛教の大道に歩む者の へ、更に附するに丁寧なる索引を 朝夕淵誦する讃頌也、斯道

に薦むる所以なり。

版

近 角 常 觀 著 (品切中)

信 仰 餘 瀝

近

角

常

觀

著

(再版準備

中

2

信

郵 定 稅 價 拾 漬 五

定 價 漬

稅 漬 錢

近角

常

觀

校

ii,

再顺

頭冠

歎

(定册) 郵税貳銭郵税二銭の郵税共七銭

剑

發

(第四版出 來

近 角 常 觀 著

發

行

森川町一番

地區

懺 情

定

漬

漬

錢

發

行

二丁目二十一番地東京市本郷區春木町 分

發

所

森川町一番地東京市本郷區

、本誌は毎月一回一日發行とす。本誌は毎月一回一日發行とす。本誌は毎月一回一日發行とす。本誌の購讀者は住 所姓名を 詳細に楷 書にて申 送ら、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事く、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事く、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事く、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事と、本誌定價左の如し 送らるべ

金 拾 鏠 金 ケケ 拾 月 錢 金六拾錢 六ヶ月 金壹圓拾錢 年 郵税一 に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

せらるべし
為替張込局は「本郷森川町郵便貯金為替取扱所」を為替張込局は「本郷森川町郵便貯金為替取扱所」宛の事

明治四十一年二月廿六日印刷

明治四十一年三月 一 日發行

東京市 發行彙編輯 求鄉區森 人人 道 白近 發川 土 角 行番 地幸常

東 京 त्ता 咖 田 區 表 神 保 M

大 賣

力觀

東

	○信仰問題の急所 ○信仰問題の急所 ○理人敵を要したまふ消息○聖人弟子を ○歌は日野左衛門也◎漏聲の教訓◎水仙 ○聖人敵を要したまふ消息◎聖人弟子を 嚴誠したまふ消息◎曉天 ○強力の真味 ○強力の真味 ○教飾自訳 三 監獄は信仰の機縁勢すべき場所なり
	◎デャータカ釋算傳 ◎新聞歌画 由 由 第五 掛の米 ◎ 正 田 の 引接
	增左 近 美灣 中 日 年 第 四 千 常 四 吾 也 表 表 表 表 表 表 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五